

一平和・共生ブックレット一

原発事故から3年

九州に避難した人たちの今



## ブックレットの刊行にあたって

1970年代の半ばのことでした。友人の姉（筑波大学に行っていた）から、「そんなに安全なら東京に原発をつくろう」という運動をしていると聞かされました。へえ、SFみたいな運動をしているんですね、とその時は笑っていたものです。その後スリーマイル島の事故（1979年）を契機に、広瀬隆さんが『東京に原発を！』を出版し、後に映画にもなりました。1986年には、チェルノブイリで事故が起きましたが、私はまだまだ目が覚めていませんでした。ドイツに留学していた友人から、放射能汚染の深刻さ、さらに緑の党の躍進などを聞かされていたのに、被災児童への医療支援くらいしか考えが至っていませんでした。

そんな私も、3年前の震災のあの日、ようやく我が身に迫った危険を察知しました。官邸で指揮をとるべき当時の菅首相が、原発に飛んでいき、それから数日後、アメリカの公共放送 NPR から、あの背筋が凍る信じられないニュース、「トモダチ作戦で（原発事故対応のための）支援に来ていた米国海軍に一時退避するよう命令が下された」と聞いたからです。（このニュースは、報道統制されていた日本では、ついに流されませんでした。）

必要な情報が遮断された中で、放射能汚染から最も遠い地域へ避難・移住することを選んだ人たちは、その後どうなったのでしょうか。この小冊子に掲載されたアンケートとインタビューは、九州に来ることを選んだ人たちの生の声です。原発事故以前には、私たちと同様、「ふつうの生活」がずっと続くと思っていた人たちは、あの日を境に予想だにできなかった運命をたどっています。

日本国内に54基もある原発が稼働すれば、同様の事故がどこでも起こる可能性があり、私たちもいつ同じ境遇になるかわかりません。フクシマを契機に、ドイツでは脱原発を選びました。それでは私たち日本人はどうするのでしょうか。

子どもたちの未来に大きな影響のある選択を、私たち大人が真剣に考えることがまず必要です。そして、すでに事故にあった人たちに対して、どんな支援をしたらよいのか、彼らの声に真摯に耳を傾けることが必要です。この小冊子を読んだみなさんが、避難者・移住者の悩みや苦しみを理解し、同じ人間として共感した上で、自分たちのできる支援を考えていただけたらと願います。

2014年2月18日 原発事故3周年を前にして  
福岡教育大学 西崎 緑

2011年3月11日、ゴーッとという地響きの後に、波打つような揺れが始まった。午後2時46分、園庭で当時4歳になったばかり息子の手をぎゅっと握りしめた。大地震により、原発が壊れ、放射能という「見えない臭わない感じない毒性が極めて強いとされる物質」が空へ、海へ、土壌へと大量に飛び散った。当時、テレビから再三流された「直ちに健康に影響はない」という言葉が不安を煽った。「直ちに」に影響はなくても、「将来」影響があるかもしれない。2011年3月、「いのちを守らなければ」という思いで、幼い子供を抱え、あるいは単身で西へ西へと移動する人たちがいた。

放射能の人体に対する影響は学術的に証明されていない事が多い。報道は連日放射能の安全性を説き、原発事故処理もコントロールされているということになっている。でも、原発事故から3年たとうとしている今でも、原発から200キロ以上離れた首都圏から子ども（あるいは自身）の健康に不安を覚え福岡に避難してくる人が後を絶たない。

原発事故後、自ら情報を集め、そして自分の判断で「避難」を選択した自主避難者はいわば国内難民であり、経済的にも精神的にも不安定であるが、政府が「被災者」と認めることはなく、公的な支援を受ける資格はない。

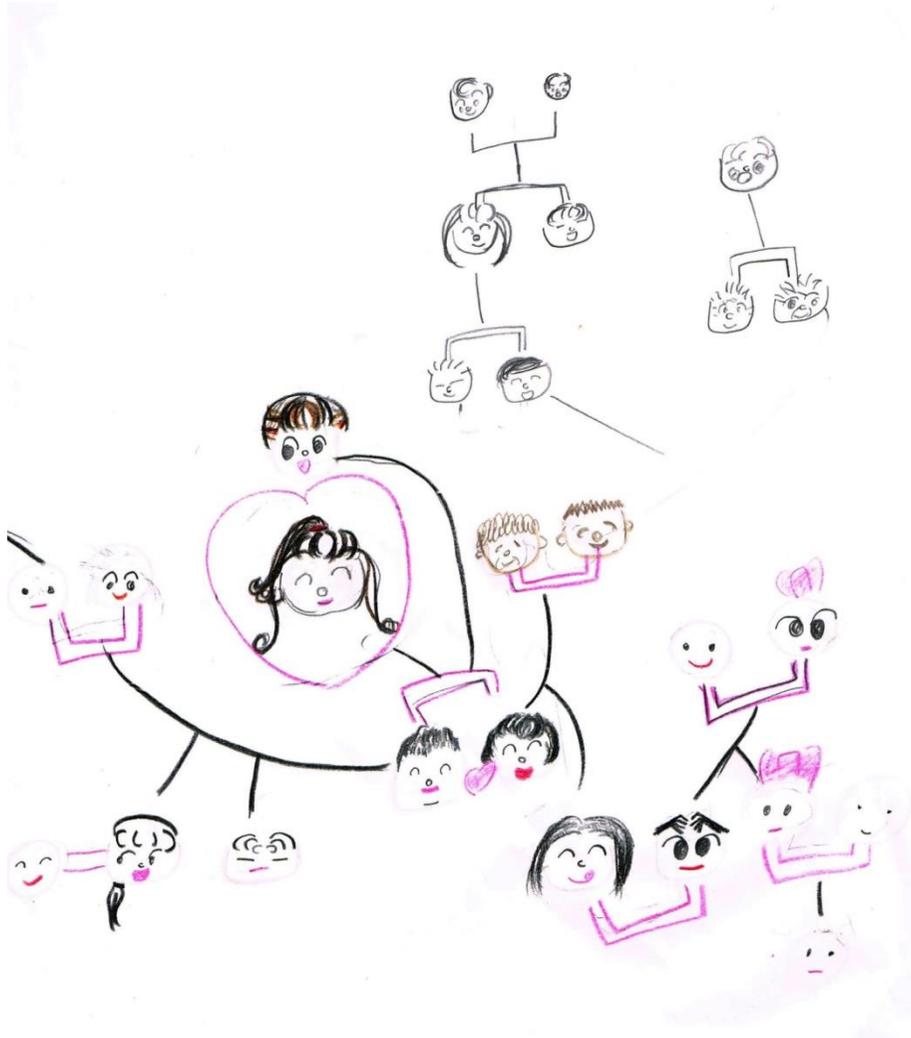
公的な情報だけでなく、独自の情報網で、避難を決めたため、周囲から放射脳と笑われ、ヒステリック、モンスターペアレンツなどの悪口雑言を浴びせられ、また、家族、親せき、友人、地域の人から白い目でみられ、普通の生活や将来のビジョンが崩壊し、家族、親戚、友人と疎遠になり、職を失い、それまで自分を育み愛してくれた故郷を後にしても、次に続く大切ないのちをできるだけ安全な場所で育てたいという気持ちを最優先にしたから避難できたのだと思います。

一般的な報道では知ることのできない原発事故がもたらした被災者が抱える問題をこのブックレットを通して知っていただくことで、あなたの隣にいるかもしれない被災者の存在を知っていただければと思います。

このブックレットを作成するにあたって、これから社会に羽ばたき、親となっていく次の世代に、原発事故の被災者としての体験、社会やこどもに対する思いを伝えられる機会を作ってください、また、(自主)避難者生活実態調査の集計をしていたいただいた福岡教育大学社会福祉学部教授西崎緑先生、そして、避難者ひとりひとりの声を真摯に受け止めて「相手の気持ちになって心で寄り添う」という一番大切な支援をしてくださった教育大生みなさまに、心より感謝申し上げます。

ふわりネットワーク・福岡 芝野章子

# 第 I 部 避難者・移住者アンケート



## このアンケートについて

### アンケートができるまで

原発事故が起きてから、さまざまな理由で九州にたどりついた人たちは、やがて避難者・移住者のゆるやかな結びつきと情報交換の場をもとめて、メールで連絡をとりあうようになりました。こうしてできたのが、「ふわりネットワーク福岡」です。

2012年11月、原発なくそう！九州玄海訴訟原告団主催の「避難ママの一年」のイベントで、芝野さんと私は出会いました。その後、2013年4月、芝野さんから、今後の行政との交渉や裁判の資料にするため避難者実態調査をしたい、というメールをいただきました。そのとき、ふわりネットワーク福岡では、アンケート調査とインタビューを考えていました。

アンケートのほうは、5月末に千鳥橋病院で無料甲状腺検査をしてもらう時に実施したいということで、急遽、ふわりネットワーク福岡のママたちと私の共同作業が始まりました。アンケートは、避難者への支援として最も大切なこと、つまり経済的支援のために二重生活での負担や、移住による収入減を中心にすることにし、5月半ばに完成しました。そして、福岡医療団が印刷をしてくれました。

### アンケートの実施

5月25日、千鳥橋病院での甲状腺検査の後、28人（検査に参加した人が23人、ふわりのスタッフが5人）がアンケートに回答してくれました。

この結果は、7月2日に中間報告として県庁で記者会見して発表しました。

さらに6月に、福津市役所が福津市内の避難者にアンケートを送ってくれました。それには、郵送で6人から回答がありました。そして9月、第2回目の甲状腺検査の機会を利用し、27人から回答を得ました（そのうち1人は2回目の回答でしたので自由記述以外は省略。）全部で60人から回答をもらいました。

### アンケートのまとめ

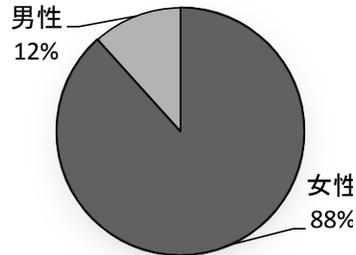
アンケートの入力作業は、ふわりネットワーク福岡のメンバーと西崎研究室で行いました。その集計と分析は、西崎が行いました。アンケートのまとめは、以下に掲載しています。

# 避難者・移住者アンケートの結果

## 1. 性別

女性	53
男性	7
合計	60

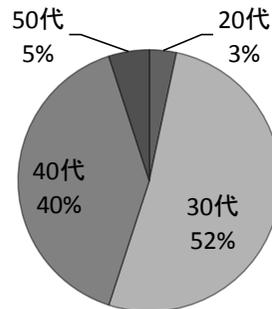
回答者の 88 パーセントが女性です。でも、男性も少し回答しています。



## 2. 年齢

20 歳代	2
30 歳代	31
40 歳代	24
50 歳代	3
合計	60

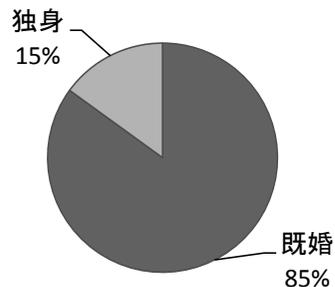
30 歳代の人が半数の 52 パーセント、40 歳代の人が 40 パーセント。ちょうど子育て期の人たちです。



## 3. 結婚

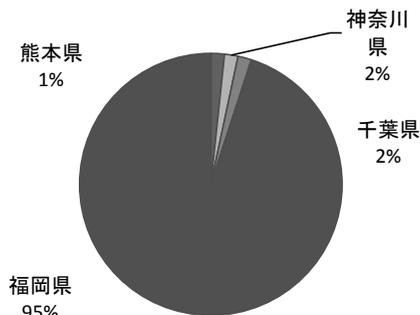
既婚	51
独身	9
合計	60

85 パーセントの人が結婚しています。離婚した人もいるので独身は 15 パーセントです。



#### 4. 現在住んでいるところ

熊本県	1
神奈川県	1
千葉県	1
福岡県	57
合計	60

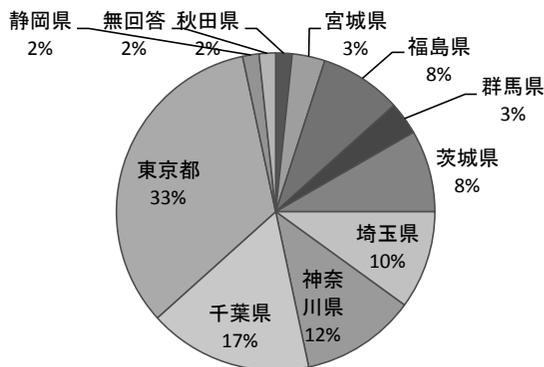


アンケートをしたのが福岡だったので、ほとんどの人が福岡県内に住んでいます。

このうち半数は、福岡市内に住んでいます。福津市の協力でアンケートを実施したので、13パーセントの人（8人）は、福津市内に住んでいます。

#### 5. 避難前の住まいは

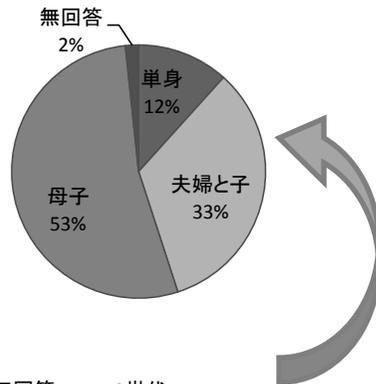
秋田県	1	東北
宮城県	2	
福島県	5	
群馬県	2	関東
茨城県	5	
埼玉県	6	
神奈川県	7	
千葉県	10	
東京都	20	
静岡県	1	東海 1
無回答	1	
合計	60	



もともと住んでいた場所では、福島県の人でも8パーセント（5人）いますが、83パーセントの人（50人）が、関東地方です。東京都内から来た人が3分の1です。関東地方は若い人の人口が多かったこと、放射能の濃度が以外に高かったこと、などにより避難の決断がなされたようです。都内、県内の地区を見ると、各自が暮らしていた地域はバラバラです。

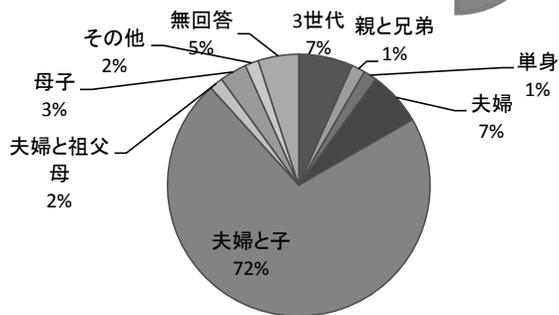
## 6. 現在同居している家族

単身	7
夫婦と子	20
母子	32
無回答	1
合計	60



## 7. 避難前の家族

3世代	4
親と兄弟	1
単身	1
夫婦	4
夫婦と子	43
夫婦と祖父母	1
母子	2
その他	1
無回答	3
合計	60



避難前は3分の2が夫婦と子どもで暮らしていましたが、母子だけで避難した人が多いので、避難後は半数が母子で暮らしています。

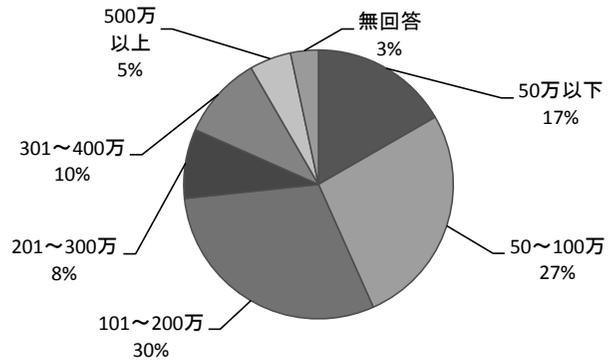
## 8. 夫婦関係

よくなった・より仲良くなった	2	距離が生まれた	1
より仲良くなった	1	(少し) 信頼感が薄れた	8
信頼が増した	2	家庭不和	8
核心にはふれられずにいるが家族の絆は強まった	1	離婚の話し合い中	3
変化なし	24	離婚した	2
無回答	3	震災とは関係なく離婚	1
非該当(単身)	4	合計	60

夫婦関係は、良くなったり深まったりした人が10パーセント、変化なしが40パーセント、距離が生まれたり不和になった人が34パーセント、中には離婚した人もいます。

## 9. 避難費用

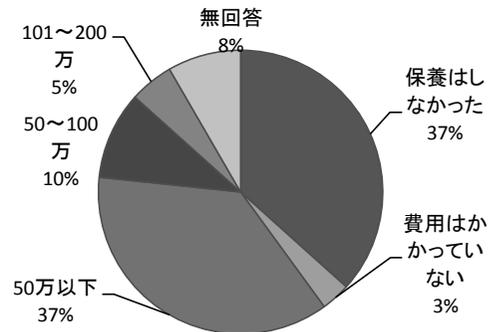
50万以下	10
50～100万	16
101～200万	18
201～300万	5
301～400万	6
500万以上	3
無回答	2
合計	60



避難・移住のためにかかった費用（引越し費用等）は、100～200万円が30パーセント、50～100万円が27パーセントとなっています。高額になった人たちには、複数回引越しをした人が含まれています。

## 10. 保養費用

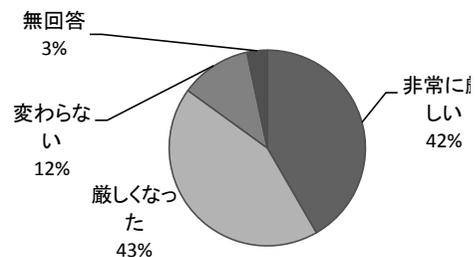
保養はしなかった	22
費用はかかっていない	2
50万以下	22
50～100万	6
101～200万	3
無回答	5
合計	60



保養しなかった人が3分の1、50万円以下の人が3分の1となっています。震災後、保養してもゆっくり休む事なく避難してきたことがわかります。

## 11. 家計の状況

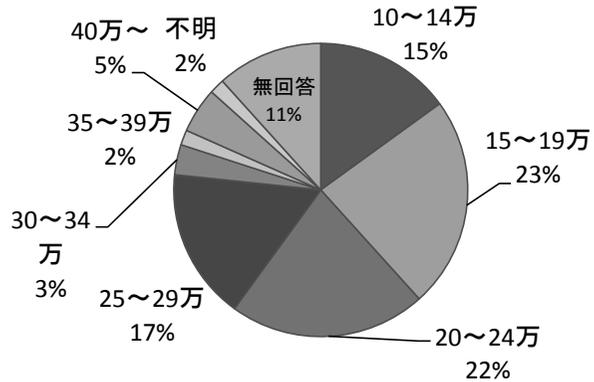
非常に厳しい	25
厳しくなった	26
変わらない	7
無回答	2
合計	60



二重生活の支出増、転職・退職による収入減などのため苦しくなっています。

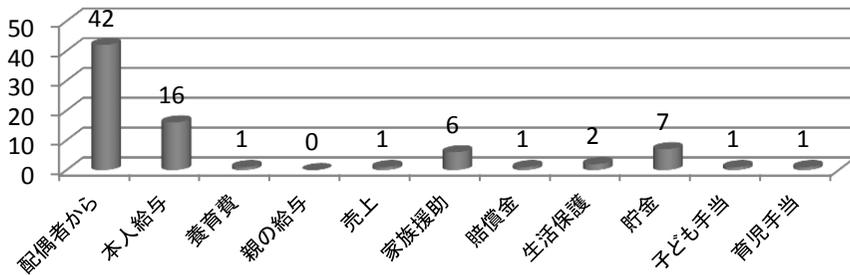
## 1 2. 毎月の生活費

10～14万	9
15～19万	14
20～24万	13
25～29万	10
30～34万	2
35～39万	1
40万～	3
不明	1
無回答	7
合計	60



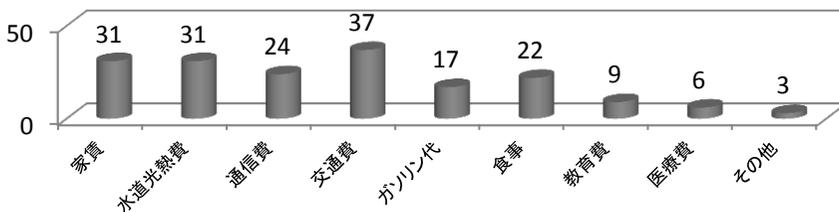
毎月20万円以下で生活している人が38パーセント、24万円以下で生活している人は全体の60パーセントです。

## 1 3. 収入源 (複数回答)



幼い子どもを抱えた母子生活が多いので、収入は夫からの仕送りに自分のパートを加えたものとなっています。

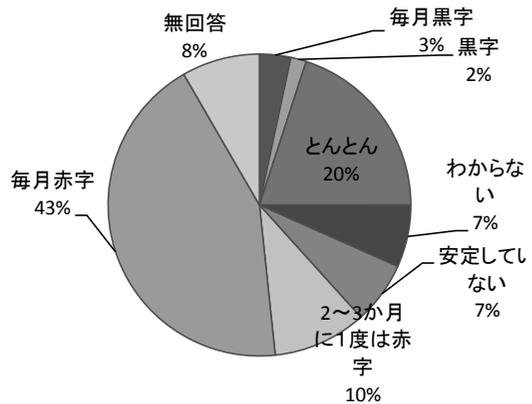
## 1 4. 支出が増えた項目 (複数回答)



二重生活になった人も多いため、生活全般に支出が増えました。

### 15. 毎月の収支

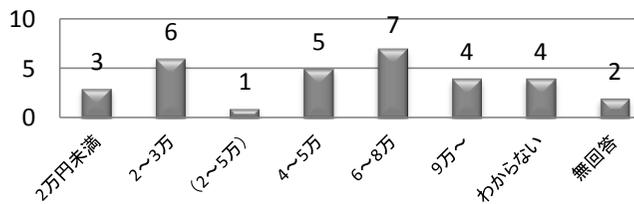
毎月黒字	2
黒字	1
とんとん	12
わからない	4
安定していない	4
2～3か月に1度は赤字	6
毎月赤字	26
無回答	5
合計	60



半数の人は、赤字が続いているようです。安定していない人もいます。

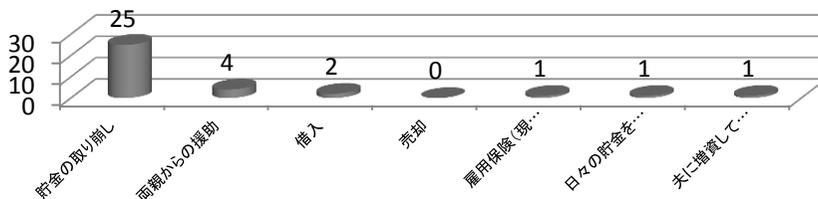
### 16. 毎月の不足金額 (赤字の人のみ)

2万円未満	3
2～3万	6
(2～5万)	1
4～5万	5
6～8万	7
9万～	4
わからない	4
無回答	2
合計	32



毎月の不足金額は、2～3万円の人が多いですが、6～8万円になる人も同じくらいいます。このように赤字が続くと家計が破綻する危険があります。

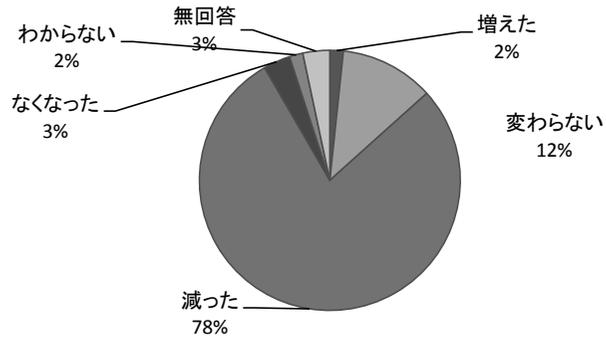
### 17. 赤字の埋め合わせ方法 (複数回答)



赤字は、貯蓄を崩して埋めています。両親からの援助を得ている人、借入資金でしのいでいる人もいます。

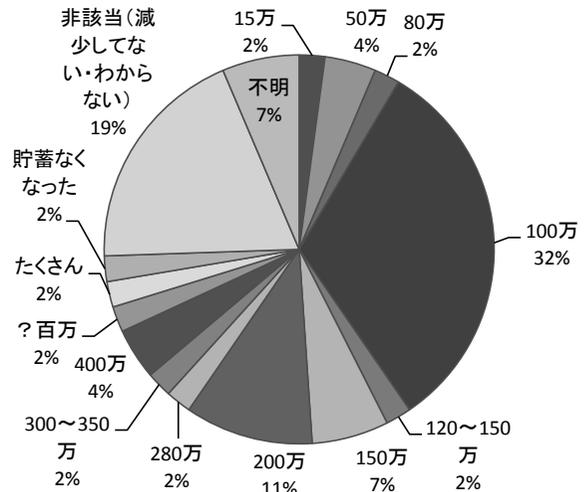
## 18. 貯蓄

増えた	1
変わらない	7
減った	47
なくなった	2
わからない	1
無回答	2
合計	60



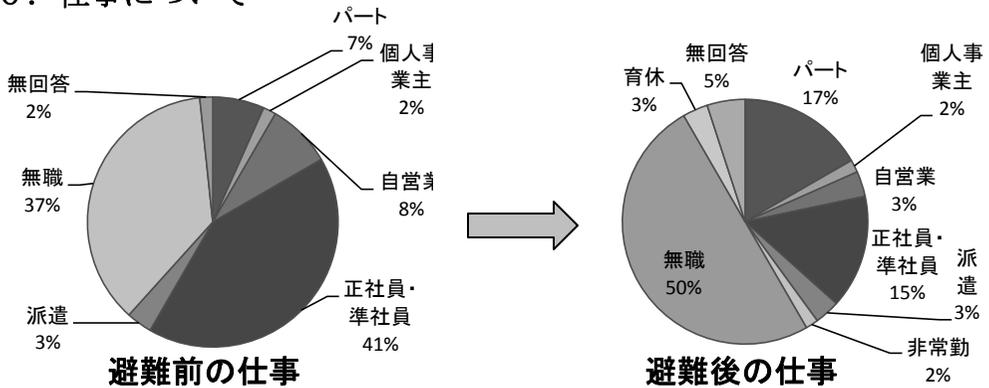
## 19. 貯蓄減少金額

15万	1
50万	2
80万	1
100万	15
120～150万	1
150万	3
200万	5
280万	1
300～350万	1
400万	2
?百万	1
たくさん	1
貯蓄なくなった	1
非該当（減少してない・わからない）	9
不明	3
合計	60



貯蓄が減少したり、なくなった人は、全部で81パーセントいます。減少額は、100万円程度の人が多いのですが、それは、避難・移住にかかった費用と重なってきます。また生活の赤字を、貯蓄を崩して埋めている人もいます。貯蓄が少なくなると、将来の生活や子どもの教育資金への不安が出てきます。

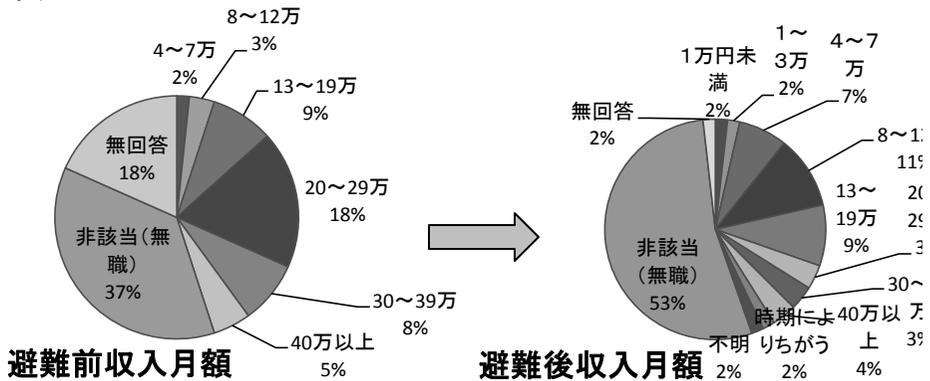
## 20. 仕事について



	パート	個人事業主	自営業	正・準社員	派遣	無職
避難前	4	1	5	25	2	22
避難後	10	1	2	9	2	30

避難前、正社員・準社員であった人は、25人（41パーセント）でしたが、避難後には、正社員は9人（15パーセント）になりました。無職が半数に増えています。

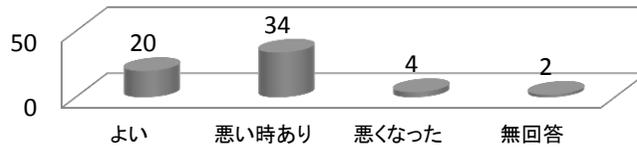
## 21. 収入について



	40万～	30～39万	20～29万	13～19万	～12万	無職
避難前	3	5	11	5	3	22
避難後	2	2	2	5	12	30

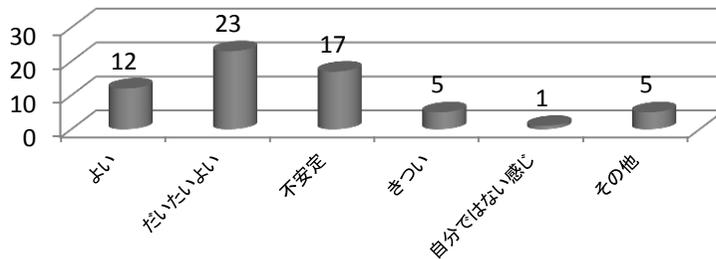
避難前には、毎月20万円以上自分の収入があった人は、19人いました。しかし今は6人しかいません。無職やパートが増えたので、収入が減った人が増えました。

## 2 2. 体調



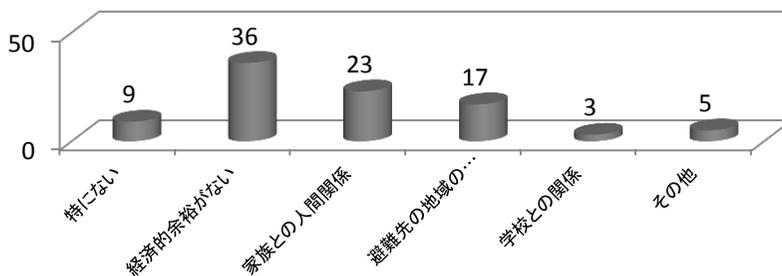
避難者・移住者の体調は、今のところ特に悪わけではありません。悪いときがあるという回答がありましたが、それが避難・移住による影響かどうかはわかりません。

## 2 3. 心の調子 (複数回答)



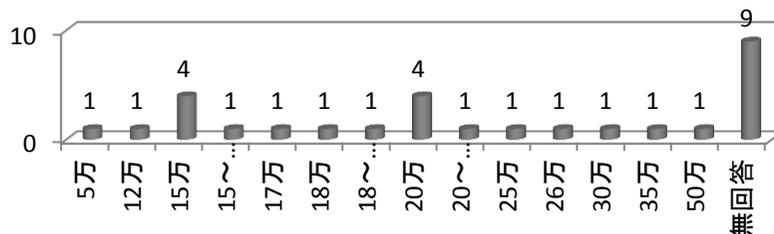
心の調子は、よい、だいたいよいようです。でも中には、不安定、きついと回答している人もいます。

## 2 4. ストレスの原因 (複数回答)



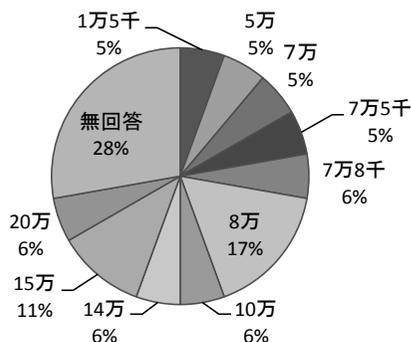
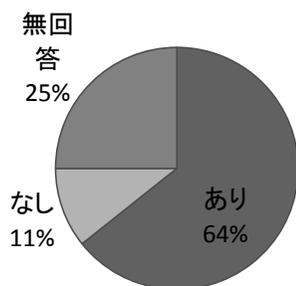
ストレスの原因で一番多かったのは、経済的余裕がないことです。その次には家族との人間関係、避難先の地域の人間関係でした。「その他」の中には、将来への不安、避難者同士の関係、子どもの障害、親の介護、さらに自民党の憲法草案、北半球では放射能から逃れられない、などがありました。

## 25. 二重生活している29人の避難元の生活費



二重生活の避難元での生活費は、月額15～20万円の間のようなようです。お父さん一人で生活するとしても、これでは大変です。

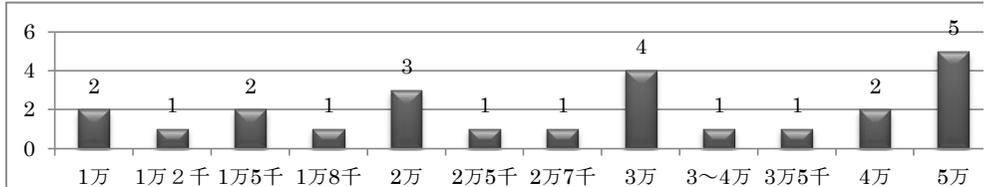
## 26. 二重生活している29人の避難元での住宅ローンの支払い



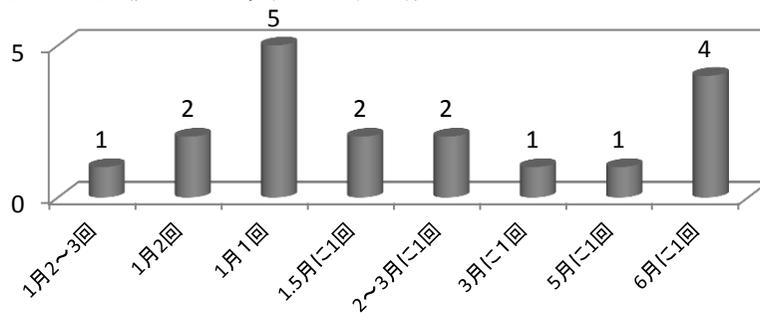
震災前に住宅を購入していた人もいたので、住宅ローンの支払いがある人が、18人います。ローンの返済は、毎月8万円程度ですが、中には月に15万円払っている人もいます。それに、ボーナス時に50万円、80万円など、まとまったお金を支払っている人もいます。帰れるかどうかわからない我が家のローンを支払い続けることは、経済的にも精神的にも難しいことでしょう。

## 27. 二重生活の家族が会うための交通費とその回数

### (1) 大人が一人移動するための交通費

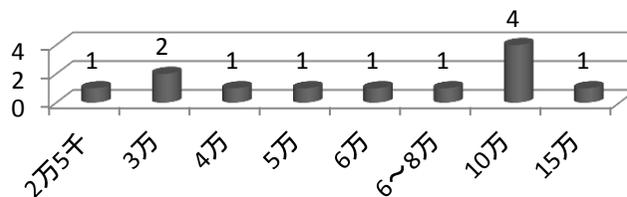


### (2) 大人が一人移動して家族が会う回数

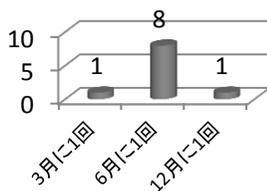


大人が一人で移動する交通費は、片道5万円という場合もありますが、関東から九州にくる場合、2~3万円はかかります。それでも月1回程度の再会を努力しているお父さんがいます。

### (3) 親子が移動するための交通費



### (4) 親子が移動して家族が会う回数



親子で関東地区まで移動すると、片道10万円かかったりします。そのため、半年に1回くらいしか行くことができません。

## 避難者・移住者の要望・意見（アンケートの自由記述から）

### （1）健康・医療関係について

- 特に子供の健康定期チェック
- ふわりさんや千鳥橋病院さんがこのような健診の場をつくってくださっていますが、これも本当なら国がやらなければいけないことと思います。ふわりさん、千鳥橋病院さま、感謝しています。
- 九州など元々放射能の影響が少ない地域の子供たちの甲状腺などの調査を行ってほしい（汚染地域の子供たちとの比較のため）。
- 健康診断
- 今回の健康診断は大変ありがたいです。避難者は皆さん健康のことが言一番気がかりだと思うので、今後も引き続き健診を受けられる様にさせていただければうれしく思います。このたびは本当にどうもありがとうございます。
- 子供が小さいので心配
- ヒパクを念頭においた健診をしてほしい。
- こどもの甲状腺エコーもお願いします。
- 定期的な検査があると助かります。
- 本日のエコー検査は画像を用いてのがほしかった

### （2）放射能や生活に関する情報について

- 不都合の情報でも開示するしくみ構築
- 情報の公開。
- 関東・東北の子どもに安全神話（うそ）をしないでほしい。
- 健康被害の事実をかくさないでほしい
- PM2.5のような予報が福島第1原発の線量が上がった時に、福岡でもラジオやTVなどで知らせてほしい。
- 小学校や中学校の情報などもたくさんあると良いと思います
- 福津市からはいろいろと情報をいただき大変ありがたいです。
- 行政からの情報提供

### （3）住宅について

- UR（旧公団住宅）とか、県営住宅の入居を少しでも優遇してください（住むところに大きな負担がかかっています）。
- 福島県以外からの自主避難者にも住宅の供給サービスがあると助かります。
- 家賃の支払いが大変なので、空き家をかしてもらえたり、何らかの補助があるとありがたいです。
- 住宅支援（市営住宅などの提供）

#### (4) 保育所について

- 保育料を安くしてほしいです。
- 現在保育園に在籍しているが、育休1年しか市では認められていないので、今年の11月には年中の次女は退園しないといけない。せめて「育休2年間は福岡で子育てしたい」と母子避難したが、次女が11月からも継続できるようになんとか認めてほしい。まだこれから先どこでどう生活するか先がみえない中、年中の途中から幼稚園に入れることも精神的にもかわいそうだし、支援もない中経済的にも厳しい。子供にこれ以上つらい思いをさせないために個別に話を市や保育課にもきいてほしい。母子避難者が生活基盤をととのえられるよう、とにかく保育園の入園基準を検討してほしい。また二重生活を考慮して、教育費、保育費などの支援を考えてほしい。世帯収入だけですべてを判断するやり方を改めてほしい。
- 保育園（お弁当、オヤツの持参 OK、牛乳などの拒否 OK）の充実
- 保育所に入りやすくしてください。母子生活で働いていてファミリーサポートを多く利用したいのですが、制約が多く、利用しづらい。
- 保育園などの入園緩和、保育料の免除や優遇

#### (5) 経済的支援について

- とにかくまずお金。それから住宅の支援や職の支援
- やはり、経済的な部分が厳しいので、本来なら国だと思うのですが、毎月いくらかでも積極的に支援してもらえるとすごく助かります。せめて生活が落ち着くまで2～3ヶ月位とか、新しく仕事が決まるまでなど。
- 医療、検査費の負担
- 医療費を中学生まで無料化していただきたい。病院代が家計に負担を感じる
- 家賃、交通費の補助。
- 国には避難にかかった費用を補償してほしい。
- 金銭的な援助がほしい。家賃、給食費、医療費など。
- 原発事故からの母子避難者に対して小学校の就学援助を認めてほしい。月3900円の給食費免除で、子供のならいごとを一つさせてあげたい。または家族再会の費用に充てたい。
- 就学援助を一部認めてほしい。
- 就学援助などの経済支援
- 埼玉、群馬、東京の実家、夫実家、その他親戚へ会いにいく度に交通費がかかる。LCCではせまく、子供が泣くと迷惑がかかる。JR新幹線やANAの避難先⇔避難元への交通費を支給してほしい。
- 家族再会にかかった交通費・父親2万×月2回×12カ月48万、母子3万×年3回=9万、日帰り2万×3回=6万、計63万円。
- 自主避難者への経済的支援
- 経済的・精神的苦痛への損害賠償
- お金が足りないので、なくなったら帰るしかありません。
- 東京から避難してきた人にも金銭的（住民税、国保等）の支援があればいいと思う。

- 東電と国は関東からの避難についても補償してもらいたい。
- 避難に必要なだった費用を補償してほしい（対国）
- 夫の交通費、家賃の援助

## (6) 食料品の安全性について

- 小学校などの公立の給食はもっと努力し、利権にまどわされず、産地明示と放射能検査をしてほしい。それから提供してほしい。
- 給食に使われる食品の検査（国の基準ではなくもっと厳しい基準で）
- 給食の安全を守ること。
- 給食の産地に東日本のものを使わない事。  
安全な九州産の食材を使って給食を作って頂きたい。
- 給食の食材を安全なものにしてほしい。
- 給食の基準をきびしくしてほしい
- 子供の安全。給食に東日本のものを使用しない、検査（1 Bg/kg くらいの精度で）する。
- 食品表示を「国内産」でなく、都道府県までの表示を義務化してほしい。生産者、販売者の方にも意識をもっと持ってほしい。せっかく避難してきたのに細かい表示がなくて食品の購入も外食もためらっています
- 食品のベクレル表示をした上で店頭で販売する、または買い物に行ったとき検査できるようにしてほしい。レストランなどでも。

## (7) 放射能汚染について

- ガレキなどの利権ではなく、危険な所にいる子供達を積極的に守って受入れてほしい。その点では市の動きは評価しています。
- 移動教室や修学旅行など西日本ベースにしてほしい。
- 雨の日は体育の授業などで濡れながらの野外活動は中止して頂きたい（放射能線量が雨の日は降下物となって落ちているため）
- 福岡の土壌調査
- 北九州の瓦礫焼却の結果の公開（健康被害の調査）、よろしくお願いします。
- せっかく安全な汚染の少ない九州に来たので九州の土地、空気が汚染されないように、（瓦礫、焼却灰 ETC）してほしいです。
- せっかく避難しても、モノや肥料の全国への流通、がれきや廃棄物の拡散で、いつまで個々が安心して暮らせるのか不安に思います。土や食品の検査を積極的にしていただけるとありがたいです。また、基準をきびしくしてほしいです。
- 震災の瓦れきは、絶対に持ち込まないで下さい!!!!

## (8) 原発について

- 原発の廃炉。
- もう原発はコリゴリ、はやくなくして！
- 安心して暮らせる日常を保障してほしい。全原発の廃炉も含めて。

## (9) 支援について

- せめて子供たちも保養や移住のサポートができるように援助する組織を立ち上げてほしいです。
- 国全体での避難・保養の支援
- 保養所の新設。
- 東日本で避難できない人の保養を考えてほしい。夏のプログラムとか。とにかく子供に安心な場所で安全なたべものを食べさせて少しでも元気になってほしい。
- 避難者向けキャンプなどの開催
- 避難者の話を市民が聞ける機会を設けること。
- どうしても父親とすごす時間が少なく、また私自身は一人で家を切り盛りしているため、子どもとすごす時間(遊んであげる時間)が避難前と比べてかなり減ってしまいましたので、学生ボランティアの方などにたくさん遊んでもらえる機会があるととても助かります。
- 赤ちゃんがいるので、家事や育児で手が足りない時に手伝ってもらえると助かります(主人や母がいないので)。
- 原発事故で住宅ローンを抱えながら二重生活し、それでも親子再会のために交通費を捻出していることを避難先の市や県に周知して、それらを本当の「復興支援」として考えて頂きたい。
- 賠償請求の相談窓口がほしいです。
- 成人の娘との母子避難です。引っ越して1年になりますが、まだ、娘は仕事につけずいます。仕事の紹介などお願いします。
- 避難者向けハローワーク
- 保育園と仕事を世話してもらえたら、とは思いますが。(ただ 311 後の意識の変化もあり、仕事なら何でも良いとは思えない方も結構いると思うので、難しいとは思いますが。)
- 避難者支援センターの設立(学校などの情報交換、交流会など)
- 生活支援、健康調査、就職支援、避難元へ戻る時の援助金
- 調査してくださってありがとうございます。御蔭さまで生活保護を受け、無事に新しい生活を始めております。
- 東京電力ばかり助けなくて被災者(被爆者)を助けてほしい
- 移住しやすくして情報を共有できるようにできれば。
- 現在も多くの理由で避難できない方々をサポートしてほしい(対県・市)
- 地元自治体との交流の場
- 心の相談

## (10) その他

- 移住している人の権利を認めてほしい（長く健康な生活をいとなく権利が侵害されている状況を政府や県レベルで真剣に考えていただきたいです。）
- 今日、なんと心がホッとしたことか。特に Y 弁護士には感謝しています。生活のこと、これからのことをお話しできたのは良かった。なぜか女性の参加者が多い。男性はなかなか参加できないのは分かるが、子供の将来を女性にだけ任せておいてはいかん。私は東京に単身赴任し、仕事をしています。妻と子供 2 人を福岡にヒナンさせ、もうそろそろ 2 年たちます。くやしい。一緒に生きたい。
- 国に訴えたいことがあります。私は町のほぼ全域が「帰還困難地域」に指定された双葉町内の福島原発から直線距離で約 3 km の所に住んでいた者です。①私達の町の汚染状況は未だ全てが明らかになっていません。さらに事故後の原発は未だ危機を脱していません。この状況で国は、いわゆる「除染」するから 5 年後には「帰還」させてやるという計画を進めています。双葉町だけではなく、半径 20 km 内で現在避難中の市町村民のうち、子供等若い世代の多くは、帰りたくないと言っています。若い世代がいなければ、町が成り立たないはずなのに、国は「帰還」としか言いません。帰還を願う人もいます。「移住」を願う人もいるのです。「国は、それぞれの住民の選択を保障する」と、基本方針を変えてほしいのです。②いわゆる「中間貯蔵施設（汚染土地等放射性廃棄物を 30 年貯蔵する施設）」を、双葉町等が受け入れる計画が少しずつ進んでいます。双葉町等が受け入れる理由は、「線量の高い地域で発生したものを線量の低い地域に運びこむことは困難」だから（去年 11 月町からの質問に小林局長の回答）。一方で「最終処分場は福島県外に設置すると国は約束をしています。矛盾していますよね。さらに前述した回答の中で「30 年後の姿については、現時点では明らかにしがたい」と述べているのです。「中間貯蔵施設」として建設し、なしくずし的に、そのまま最終処分場化する可能性が高いと思います。ところが「中間」か「最終」かという議論は全く無いままに現地の調査が始まりつつあります。私自身は幸い九州で職に就けたので、妻との二重生活もなんとかやっていますが、「国」は住民の敵なんだと自覚させられました。

## 第Ⅱ部 避難者・移住者インタビュー



## インタビューについて

### インタビューが始まるまで

2013年4月、ふわりネットワークは、①避難者の生活実態の把握により、原発事故の避難者が抱えている問題を社会的な問題として示唆する、②原発事故のことを後世に残す、③話すことによって、避難者自身の気持ちの整理がつく、などの理由で、アンケート以外にも聞き取りを行いたいと考えていました。しかし、問題は聞き取りをする第三者を確保することと、聞き取った内容を文章に起こすことでした。子育てや家事でママたちにはその時間的余裕がなかったからです。

そこで、アンケートが一区切りついた10月、芝野さんと西崎で打ち合わせをしました。芝野さんがふわりネットワーク福岡の関係者でインタビューに協力してくれる人を募り、西崎の授業（社会福祉援助技術専門演習Ⅱ）の受講生18人がインタビューをすることにしました。この授業の受講生たちは、社会福祉士を目指しているので、コミュニティワークや社会福祉調査の技術を使って、地域に暮らす人々の福祉課題を見つけ、それを地域の人たちの力で解決していく仕掛けづくりをする、という目的を持ってインタビューに臨みました。

### インタビューに際して

アンケート結果とアンケートの内容を一通り見たあと、11～1月はじめにかけて学生たちは、インタビューに出かけていきました。幼い子どもがいる方も多いため、ママたちの都合のよい時間に、お住まいの地域でインタビューが行われました。

学生たちに西崎が指示したのは、「自分が聞きたいことではなく、相手が話したいことを聞いてきなさい。」ということでした。原発事故、避難・移住という経験は、学生たちの想像をはるかに超える経験です。聞き手の想像をはるかに超える場合には、まず相手の語るストーリーと、背後にある価値観を受け止め、相手の世界観を知ることから始めなければならないからです。

聞き手としては、まだまだ十分ではなかったかも知れませんが、学生たちの努力の成果は、インタビュー記録にあらわれています。また、その後、彼らは、もし自分が社会福祉協議会の職員だったら、コミュニティワーカーとして何ができるか、現場実習での経験をもとに考え企画書をつくりました。彼らの若々しい感性で考えた企画は、第Ⅲ部にのっています。



## (1) Aさん

福岡の前は、東京の小金井市に住んでいた。放射能の汚染度合いは薄い方。

3月11日は、自宅で確定申告を書いていた。地震が来てびっくりした。

そのあと、地震でゆれるたびに避難所へ行った。

福岡に実家があるので、両親と連絡を取っていた。

両親がチェルノブイリ事故以後原発のことについて調べていて、原発事故は危ないと連絡がきた。

夫は仕事で身動きが取れなかった。帰宅後、避難について話し合うことにした。

夢のような世界の話で、原発に事件が起こっても国が隠ぺいするだろうと話し合った。その後…緊急事態宣言を政府が出したので、「よっぽどやばい」と思い、岐阜の友達の家で避難することにした。

次の日、原発が爆発したので、妊婦さんは東京に帰れないと考えて、実家の福岡へ避難することにした。でも、チェルノブイリは1200キロの西ドイツまで高濃度放射能が来ていたということを知っていたので、九州でも危ないのではと心配になった。これは大げさなことではない。被ばくすると取り返しのつかないことになるから、3月18日ごろ海外脱出を考えた。

海外に行けば、子どもを日本じゃないところで育てることになる。でも、日本を故郷だと思ってほしい、という思いが出てきたし、自分自身「こんな日本が好きだった」ということを自覚した。結局、子どもが臨月だったため、生むリスクを考え九州にとどまることにした。

東京の家をどうするのか、ということになったけど、都心で基準値を超えた放射能が観測されたというニュースがあったので、そんな中で子育てするのはリスクが大きいということで引越すことにした。

最初の1年は実家で、夫は求職活動をした。今住んでいるところの近くに仕事が見つかったので引越した。

夫は研究者の夢を全部捨てることや、自分の地元じゃないため、疎外感や不安が大きい。確かに、積み重ねてきたものをなくしたが、福岡に来て、放射能のリスクがなく、実家も近い、ということがよい。

両親が原発事故について発信している。重要な事実については、みんなで情報をシェアしていくべきである。自分も原発事故の勉強会に参加するようになって、何もしないではいけないと思った。それで前に向かうといった意味で、食に関心を持つようになった。

九州にいつ放射能が来るのか、考えると怖くて、防ぐ方法はあるのかと考える。窓をガムテープで目張りすることや、食べ物を買占めることは前向きなことではない。だから、それ以外に何かをしようと思い、市議員に国に意見書を書こうと働きかけた。それをやるようになってから、元気になった。

ママ友とは、ちょくちょくあっている。東京の知り合いはあまりいなくて、会うのは、高校の時の友達など。

地震後、「原発しっちゃん会」に参加している。来てくれる方々は、避難して来た方だけでなく、元からいた方もいる。避難して来た方は、もとの知人・友人が少ないので、今後、会を通してそのつながりが広がっていくと思う。避難、仕事、友達、家族はプライベートの問題であるけれど、乗り越えてきた人たちは分かり合える部分がある。

現在、育休中である。育休を利用して避難していることは、職場の人々は気づいていると思う。3月11日…関東の友達に「実家に避難するから、九州に来る場合は実家来ても大丈夫だよ」とメールを送る。しかし、夫との共通の友達から、「仕事を休めない」「おばあちゃんがいる」などと、いう理由で、「ここは危ないので行きたいけど、行けないからやめてくれないか」と言われた。それを見て、心は複雑であった。その後から「直接的に相手の気持ちを理解できないと怖い」と思うようになった。メールをきっかけにマイナスのこともあったけど、送ってよかったと思う面もある。私のように、リスク少なく自主避難できるということは幸運な例なので、啓発を余計頑張ろうと思う。

東京を引き上げようといったのは夫からである。内部被ばくについての本を読んでいたかららしい。でも福岡では、夫の仕事は非常勤で正式なものではない。今後は、おそらく西日本のどこかに引っ越すと思う。

食のことに、福島の避けたい。でも、それを作ってくれている人もいることも知っている。(生産者が)一番危険にさらされているから、その人たちが早く避難できたらいいと思う。

国に求めることは、放射性物質を増やすことを辞めてもらう。最低シーベルトの基準を超えている。チェルノブイリの近くの人々に日本の基準を言ったところ真っ青な顔をされた。避難基準というものを健康第一でやってほしい。もっと国民のことを考えてほしい。

おかしい。教育委員会にお願いすると施設費は半額になるのに、自治体に頼むと断られる。遠くの場所なのに断られるのはなぜ…??

何か活動に携わっていないとストレスになる。今後は、子どもと畑を作りたい。伝えるもの、伝えたいものは何かを考える。本当の豊かさとか。それから食に関する活動を全国へ広げたい。私たちではなく、国が伝えなければならない。(放射能に汚染されたものを食べないために)生産地をどこまで避けていくか、とか。とにかく、情報は隠さないでほしい。

外国へ行くならニュージーランドかなあ…。



## (2) Bさん

### ■避難直後の様子

——避難前に住んでいたところ、その被害状況を教えてください

避難前は福島県の郡山市に住んでいました。確か、震度は6弱から5弱ぐらいだったと思います。内陸部だったから津波の被害はなかったものの、ブラウン管のテレビがズレ落ちたり、道路が割れたりする被害がありました。揺れが強く、長くて死んでしまう

かもと思った。実家に一月に生まれた長男と母と叔母と四人で団らんしていたところに地震がきた。

—いつ避難してきましたか、なぜ避難しようと思ったのですか

2012年の1月に避難した。震災直後に母に避難したほうがいいと言われたが、自分の身体が完全じゃなかったことと、子どもが小さくて不安だらけだった。夫は話が合わずですぐに避難ができなかった。地震も続いていて、原発から出ている見えない放射性物質が恐かった。子どもには安心して思い切り外で遊べるような環境が絶対必要だと思っていたから避難を決めた。

—なぜ福岡に避難しようと思ったのですか

できるだけ西の方が安心かと思って。

—持ってきたものや必要となったものはありますか、どうやってきましたか

高速道路を使い、車で、運べるものは積んできた。10時間かけて滋賀県まで。一泊してさらに10時間かけて福岡へ。車の中の放射線量が郡山から滋賀にかけてどんどん下がっていて、やはり異常な事態だと実感した。

## ■現在の状況

—福岡に来て良かったことや不便なことはありますか

福岡は交通面がとても便利。特に不便なことはない。ただ、サバサバしている人が多く、車の運転が荒くて怖い。

—福岡に友達はいますか、周囲の人にどのように受け入れて欲しいか

同じ境遇の、避難者の方達が心強い。近所や子育てサークルの人たちも非難しないし、少し気にかけてくれる。特別扱いはしないほしい。

—家族はどんな様子ですか

子どもに健康被害はない。夫とは避難した年の8月に離婚をした。福岡に避難して来る前から避難に対しての意見の食い違いがあったせいかと。夫は避難しなくても大丈夫だろうと考えていたから。

—何か給付や支援はありましたか

住宅支援を受けている。2012年の1月から2015年の1月まで。赤十字から家電を6点支援してもらった。テレビ、冷蔵庫、洗濯機、電子レンジ、ポッド、炊飯器。

## ■今後の生活、その他

—郡山に帰りたいですか

自分が生まれ育った地だから、原発事故がなければ福島の豊かな自然の中で子どもを育てていた。毎日帰りたいている。でも、帰れない。住んでいる人は大勢いるけど、私は帰らない。原発が収束して、除染をして事故前の放射線量になれば、帰ろうと

思うが。

——今後のどういう進路を考えていますか

子どものために活動したいという気持ちがある。放射能に汚染された食べ物を食べることで子どもに影響が出てくると思うから。学校給食をゼロベクレルに。

——国や地域に求めることはありますか

原発について国がきちんと知らせていないから、警戒度や認知度は低い。国に対して反対する人や声を上げる人をお金で黙らせるような国のやり方には納得できない。メディアの情報の扱い方にも不満がある。

事実だけを求む。



### (3) Cさん

避難前は、東京都杉並区 高円寺駅の近くに住んでいた。現在は、福岡県内に住んでいる。

#### ■震災時のこと

Cさんは、工作中だった。地震中はパソコンが落ちないようにモニターを抑えていた。あとは、蛍光灯に気をつけていた。長い地震だった。電車は止まっているが、帰る頃には動いているだろうと会社でのんびりしていた。しかし17時18時になっても電車が動かなかったため、急いで帰宅。自宅には、会社から歩いて3時間かかった。帰宅中、コンビニに行ったが、おにぎりは全てなくなっていた。

旦那さんは、家にいた。旦那さんも家のテレビをおさえていた様子。

Cさんと旦那さんは、Sメールでれんらくを取り合っていたため、お互いに無事であることの確認はできた。

#### ■震災後のこと

放射線のため、子どもに水は飲ませなかった。枝野さんの言葉に不安を感じていたが、東京は大丈夫だろうと考えていた。しかし、近所の芝生から放射線が検出されたため、不安になった。4～5月ごろから、チェルノブイリの問題や、マンガとかで危険性は知っていた。そのため、放射線が検出されたことを知り、まずいのかなとパニックになる。

ゴールデンウィークは、どっかの大学の教授である武田さんが、ゴールデンウィーク中にこういうことをしたほうがいいよと言っていた。(放射線に対して、床の水ぶきや、濡れた洋服は一回水で洗って洗濯するとか・・・) こういうのを聞いて実践していた。

2歳の子どものに関しては、よく転んだり、砂などを触ったそのままの手でものを食べたりすることが一番怖かった。また東京だと野菜はほとんど関東のものだったため、食べ物などは西日本から取り寄せないと安心できなかった。放射能を調べれば調べるほど

怖くなっていた。朝から晩まで一日中放射能の事を考えていた。

旦那さんは、以前はあまり、放射能に関心がなかった。仕事から帰ってきたそのままの状態ですトンへ行ったりと。このような旦那さんの行動に対するストレスもあった。

## ■避難

事故後、10ヶ月くらいは東京にいた。

収入がなくなるのはいやだけど、収入は子どもを育てるためのものだから、放射能によって子どもが甲状腺がんになるくらいなら貧乏になるほうが良いと考え、避難を決意した。1999年に入社し、12年間働いた職場だったが退職した。

移住したいと考えた時、放射能が届かない200～300kmのところを選ぼうとした。でも、そうすると、紀伊半島の端か、北海道の端か、沖縄しかなかった。

失業率のこととかも考えて、(仕事が見つかりそうな)福岡に移住することにした。また、旦那さんの出身が福岡県だったこともあり、とりあえず福岡にしますかといった感じだった。移住先は、電車でどこでもいけるところというのを考えて、現在住んでいるところにした。旦那さんも2012年の1月末、会社を辞めて福岡へ来た。

避難の際は、服とかは洗えば大丈夫だと思って、減らしはしたが持ってきていた。以前、放射能測定所のスタッフとして働いていた時、そのとき着ていた子どものズボンとかからも放射線が出てきた。

行動が早い人を見ると、羨ましく感じる。無知だった自分がいや。

家族の理解もあった。自分の実家は、茨城県の南の方だが、実家の方も理解してくれていた。(震災前は、2か月に1回くらい帰っていた。)実家から洋服も送ってくれていたが、震災後は送らないでと言っていた。両親に対して申し訳ない気持ちだった。

## ■今の収入

旦那さんの仕事で少しずつもらっている。でも貯金を食いつぶしている状況。

## ■福岡のいいところ

福岡にきて良かった。福岡は精神的に人に余裕がある。高校生も息子と遊んでくれる。また、地震がないのがいい。子どもがそこらへんの畑でごろごろしている様子を見ると関東ではできなかったなど実感。不便に感じることはない。

## ■不安

黄砂、PM2.5が心配。

夫の仕事がないのも不安。

## ■福岡での支援

今住んでいる市では、住民票とかが無料になった。自衛隊基地で避難家族を呼んでBBQなどもしてくれた。避難者は5%引きになるお店もあった。

## ■あったらいい支援

収入が約束されていれば、もっと避難してきた人もいたと思う。住むところも大事だが、

仕事も大事。移住で主人の理解が得られなくて、母子家庭になる人もいるから、(夫に仕事があれば一緒に避難できる)。仕事を見つける支援がほしい。

避難者の中には、外食ができない人とかもいるが、Cさんはそこまでではない。ただし、学校の給食を西日本のものにしてほしい。Sさんは、毎日子どもに給食ではなくお弁当を持たせている。給食が西日本の食材のみを使ってくれれば、毎日のお弁当の労力が減る。

子どもを預けられる支援を充実してほしい。

避難してきた人は、こっちで住む決意をしているから、避難者を特別扱いするのはやめてほしい。

## ■友人関係

知り合いとかはみんな移住している。

福岡の給食センターに見学に行ったりしたときに知り合って、個人的に友だちになったり、近所の人との関わりもある。お茶をしたり、情報交換をしたりする。外食でも、ここのお店はいいよとか、ここは危ないとか。どうしても子どもの食べ物の話になる。でも、世の中からの人からするときちがいだと思われる。

## ■これから

農業をしながら生計を立てていけたらいい。だが野菜を作りながらいつでも逃げられる準備もしておきたい。

日本が戦争に突入するのなら、日本を捨てる覚悟もできている。子どもを戦争にも、原発処理にも行かせたくない。

東京では、食べ物を買えないから、作るスキルがほしいと考えていた。今は、農業で少しお手伝いをしている。東日本の人が、こっちに移り住める環境を作るような、西日本の農地を増やせるような仕事をしたいと考えている。

## ■子どもに伝えたいこと

子どもが食べるものは、西日本の食べ物を食べてほしい。

NHKすらも重要な事を報道しないから、物事を自分で調べることをしてほしい。今のTVは国民が知るべきことを提供していない。知って考える情報を提供していない。自分で情報を見て、大丈夫なのか判断してほしい。周りの目を気にしすぎて、NHKや政府が大丈夫って言っているから大丈夫と思って何も調べない人が多いから危険だと感じている。

友人から避難したことについて勇気があるなど言われた。でも、福島とかに住み続ける方が勇気のいることだと思う。良いことも悪いことを受け入れられるように。避難するのも残るのも当たり前になったらいい。

日本がなくなっても日本の文化が残っていればいい。



## (4) Dさん

### ■避難までの経緯

東京都江戸川区に住んでいた。仕事先の新宿区で震災にあう。当時、子どもは幼稚園児と2歳であった。

2011年4月 子どもを保育所に通わせるが、放射能の危険性を訴えたのにもかかわらず、外遊びをさせる保育所の方針に納得がいかず、5月から通わせなくなり、話し合いを続けながら理解を示してくれた無認可の保育所に通わせた。しかし、元の保育園では子供を守れないと判断して6月に退所した。

退園をきっかけに移住に舵をきって、2011年11月に家が売れたのを機に東京を出た。夫はすぐ久留米のほうへ移住したが、母子で4か月四国の実家にいた。2012年4月久留米で家族一緒に移住生活を始めた。

### ■仕事と放射能の知識について

ファイナンシャルプランナーの資格を活かして働いていた。東京にいた頃は、保険料や治療費などあくまでファイナンスの面において、がん医師にインタビューなどをしてきた。(現在でもこの仕事を続けており、避難者の金銭面の相談に乗っている。) 仕事柄、がん治療における放射線の効力を学んでいた。子どもにも、その素晴らしさを伝えていた。しかし震災の影響で放射能が巻き散らかされ、「普通の生活上にこんなに力があるものが巻き散らかされているって危ない」と思った。

### ■子どもへの関わり方

Dさんの仕事の話や、放射線の効力をよく耳にしていた子どもたちは、震災後、Dさんが放射線の危険性を説明してもなかなか理解できなかった。Dさんは(放射線を恐れ)、子どもたちへ「命や身体に影響があるよ」と言い続けた。学校の給食は食べさせずにお弁当に変えたり、プールには入らせなかったり、魚は控えたり、少しの雨でも傘をさしマスクまでさせたりしていた。給食とプールについては、学年で一人だけだったので、子どもはストレスを感じていただろうと思う。

今でも給食の産地表を見て、危険だと感じるものは残させたり、海のもの控えたりするようにしている。

子どもは東京に行って、友達に会うのが夢だと言っている。子ども自身も汚染された場所に長くいるのはダメだと思っているらしい。

### ■家族(とくに夫)との関わり方

放射能のことについて夫にも危険性を何度も説明し、その上で夫の実家が福岡県内であったため、「福岡に帰ろうよ」と言って避難する方向へ話を進めていった。夫は福岡県が好きだったため快く了承し、避難が実現した。

しかし、そのように上手くいくところは多くない。放射線は目に見えないものだからただちに生活に影響が出るというわけではないと言ってはねのけてしまう経済活動優先

の夫もいる。そうすると、健康管理優先の妻と価値観の違いが生じて、うまく避難につながらない。身体の影響は女性のほうが感じやすい。だけどそれを男性にわかってもらうのは難しい。

母子避難は、相談できる相手が少なく、また、夫と離れて生活してしまうと相手のことがわからず、家庭不和につながりやすい。やはり家族全体で避難すると安定するのだが、なかなかその実現が難しい。

### ■相談相手など

夫は仕事重視なので、家庭のことはDさんが中心に回していた。江戸川区に住んでいたころの相談相手は、夫よりも子どもを持った母親だった。避難しても、そのころの友達とは連絡を取っていたが、自分が安全なところからまだ避難できていない人に連絡するというのがだんだんと後ろめたくなり、疎遠になっていった。

今では避難者同士で話すことが多く、共有できるものが多い。避難して半年ほどは、自分が避難者という自覚も持っていないくらいであったので、避難者となつなぐことは考えていなかった。でも、いろいろな出会いがあり、九州各地の避難者となつなぐた。避難者同士は、お互いの状況もわかっているから話しやすく、本音を言い合える。

### ■精神面の変化

働いているときは、結構自己中心的な人間であったと思う。しかし、震災にあってから「人類みな兄弟」のように思い、支えあっていこうと感じた。

東京にいた頃は、保育所へ放射線の危険性を語って、疎まれるモンスターペアレントと言われた。けれど、自分の良心に従って子どものために行動したら良いと考えていたため、人の目も気にならず、子どものために何でもできた。

「自分に嘘をつかないことが爽快」。正しいと思ったことは、少数派になっても貫くことが大切だ。

### ■経済状況について

東京にいた頃に比べると、収入は半分近くになった。家計に余裕があるとは言えない。暮らしの良さを考えたら東京にいたほうが断然良かったけれど、精神的に安定している今の暮らしのほうが良い。

保育所を二つ通った時期があり、認可と無認可を合わせて10万円以上かかったこともあった。でも命のために使うことが大事と考えていたから、貯金も出せた。

東京に居続けて病気になって治療のためにお金を費やすより、健康維持や子どものためを考え避難すべきと考えたので、避難のための出費もためらわずできた。

### ■社会資源や支援について

まずは、食べ物に関して、東京で売っている食品は安全なものが売ってあると思えなかったため、スーパーに行っても買うものがなかった。しかし、福岡は産地から安心して食材を買うことができ、普通の生活ができることが一番うれしい。

また、親類がいてくれるおかげで、直接的に何か支援してもらったというわけではないが、安心感がある。それから子どもも外で遊ばせることができる環境なので、あらゆ

るものがサポートしてくれているという気持であった。

しかし、他の避難者のことも考えると、情報の一元化は大切なのではないかと思う。受けられる支援はたくさんあるのだろうが、窓口がいくつもあつたり、情報が回らなかつたりして、結局どんな支援が受けられるのかが分からなくて困る。避難者は生活を回していただだけでも大変で、健康状態や精神状態が良くない人だっている。支援が必要な人に情報が届いていない状況があるので、その本人が行けなくても、代わりに伝えることができるようになると良いと思う。

子どもへの支援がもっとあればと思うことがよくある。新しい環境になじめない子は勉強についていけない。塾に行くお金もないため、学習支援があればよいと思う。

また、発達障害を抱えている子もいるが、わかりにくいいため行政のサポートから漏れていると思う。母親も子どもも安心できるような精神的ケアが必要だろう。行政だけでなく、民間の支援で漏れを救っていくような支援があればよい。

若い人たちがよく被災地に向かって支援をしに行くけれど、被災地じゃなくてもできる支援はたくさんあるから、放射線のリスクをもっと考えた上での支援をしてほしいと思っている。

## ■将来の展望

健康で長生きして、今後日本がどう変わるのかを見ていきたい。

子どもも、学業より健康第一で育てていきたい。子どもを病気にさせて「あの時逃げていたらリスクを減らせていたかもしれない」と自分の判断を後悔したくないので、子どもを優先してきれいな環境を選んで暮らしていきたい。そのため、究極日本全体が危ういとなったら、子どもだけでも海外へ送ることを考えている。

## ■学生たちに伝えたいこと

放射能は目に見えないが、威力がとても大きい。東京の小学校では、震災後、クラスで鼻血を出す子が急増したり、入院する子が増えたりしたことがあった。これらの原因ははっきりとわかってはいないが、疑問を持つべきことではないだろうか。

放射能については、テレビなどで報道されていることが全てではない。報道されないが「おかしいな」と思う事実は山ほどある。だから、色々なところから情報を取るべきである。放射能について反対の意見だけでなく、賛成と考えている人の意見も聞いて、両方の意見を聞いて自分で判断していくことが大切である。

放射能のことに限らず、自分のアンテナに引っかかったものをしっかり研究していただく。



## (5) Eさん

### ■避難までの経緯

当時、横浜の職場（中学校）にいた。震度5ほどの揺れが続き、中学校1、2年生が

部活をしている時間だったので、全員グラウンドに集合させて地域ごとに集団下校させた。

計画停電の報道などを見守り、震災の影響下にいるなと感じていた。

3月12日、当時1歳の息子のことを考えると、すぐにでも福岡の親戚のところに行きたいと思っていたが、飛行機のチケットも取れず、新幹線は長時間になるし、仕事も休めないので断念した。

放射能は微量だけど気になり、1か月は息子も外に出さず、飲料水にも気を使っていた。親戚が息子のために飲料水をくれることもあった。やがて子どもは保育所に通うようになり、日常を取り戻しつつあった。だけど、Nさん自身が、震災を終わらせることができなかった。放射能に汚染されたものは食べさせたくなかったため、以前のように気軽に買い物ができず、緊張して出かけていた。食べ物は、ネットで西日本のものを中心に買っていた。

夫は福島出身だが、震災以降は盆も正月も、子どもを連れて実家に帰ることができなかった。福島県の中通、白河に実家があり、震災直後に夫が向かったが、物資の流通が止まっていてひどい状況だったと言っている。ガイガーカウンター（放射能測定器）を購入し、白河周辺を測定してみると、高濃度であった。実家の雨樋の下は10 $\mu$ Sv/hという値になり、こんな数値は見たことがないと驚いて写真を撮ったりもした。子供は、ほこりや内部被爆を恐れて、福島には連れて行っていない。

2011年5月、横浜でも測定してみると、震災前の2倍の数値になっていた。

避難先に久留米を選んだのは夫である。就労セミナーに参加した際に、久留米地区担当の人の対応がよかったことがその理由らしい。田主丸も候補にはあったが、こちらの方の土地を選ぶことにした。

## ■避難について

避難のきっかけは、自分の両親が福岡出身で、移住しやすかったことと、安全な食べ物を求め、子供の健康を守りたいと思ったからである。

夫は陶芸をしている。震災後、実際に口に入れるものは自分たちで手に入れようと思って、農業を始めようと、現在研修を受けている最中である。

原発の問題を色々な人たちに伝えたいと考えている。横浜にいるよりは、(福岡にいるほうが)具体的なアクションが取れるのではと考えている。

## ■経済状況について

今年度、横浜から継続勤務として福岡県に採用された。運よく教員採用試験に合格したのですぐに働くことができ、4月段階での給料の変化は見られなかった。ただし、今年度全国的に公務員の給料が削減されたことについて痛手を感じている。

夫の収入が止まったことと引越しの費用が少し痛かった。

## ■家族や周りの人について

息子は保育園が変わったことで、1、2か月は泣いていたが、今は慣れたようすだ。大野城に住む親戚のサポートもあり、心強いと感じている。

今は借家暮らしだが、永住できる場所を探したいと思っている。こうしたことは、

土地勘のある周りの先生や親戚に相談をしている。

### ■社会資源について

夫の農業のこともあるので、土地、住居、耕作地の紹介をしてくれる窓口があればと思う。また、受けられる支援をまとめて聞けるような窓口があれば助かる。

ふわりネットワークから、移住先での地域のイベントの情報をもらえることが、とても助かる。情報をもらえなかったら、「知らない」で過ごしてしまうだろう。

知らない土地で過ごすことはストレスであり、移住者同士だと家族の中でしか話題にできないことや情報を共有し合える心強さを感じる。

潜在的に移住したいと考えている人はたくさんいるだろうから、そうした人たちが救われる環境作りがあればと思う。例えば、就職セミナー、住居の斡旋、引越しの補助など。自分も「移住しやすい環境があるんだ」と伝えていきたい。

### ■今後について

食の安全や脱原発の問題と関わっていききたい。

### ■学生へ向けて

原発の問題はリアルなものとして考えられないかもしれないけれど、身近に感じてもらい、ショックを受けてほしい。「チェルノブイリハート」というドキュメンタリー映画はおすすめ。その中で描かれている健康被害などが日本でも起きつつあるので、なるべく最小の被害でとどめたい。若い人はもっと危機感を持って受け止めて、問題を直視してほしい。

日本の事故の様子を見て、ドイツやイタリアなどはすぐに脱原発に向かって動いたが、日本がなかなかその方向へ進まないのはなぜかを考えてほしい。原発は核兵器の開発と根っこは同じなので、やはり戦争をしたいのではないかと思ってしまう。原発の問題は、国の平和に対する思いがあるかないかということともつながっている。

今は、マスコミが政治と一体になってしまっている。中には良心的な番組もあるけれど、残念ながら与えられる情報が少ない。マスコミが、原発と関わっている企業とのつながりを断ち切れないから、日本全体が脱原発に向かうことができないのではと考えている。



## (6) Fさん

群馬県館林市から避難してきた。東京まで一時間半くらいのところだけど、都会的な感じじゃなくて、ベッドタウンで農業が盛んなところ。

被災したとき、震度5弱だったのかな。塀が倒れた家もあったが、特に大きな被害はなかった。群馬県は海が周りにないから津波がなかったし、停電、ガス、水道が長く止まるということにはなかった。一日、町半分が停電するぐらいですんだ。ライフラインは

つながっていたが、電話だけはつながりにくかった。

一番心配だったのはずっと揺れてたこと。一時間くらい、じめんがこういう感じにスライドしていた。5分ごとに地震、立ってられないので、しゃがんだ。

地震は、お迎えで、息子と幼稚園から「さあ帰ろうか」というときに起きた。他の幼稚園の子供たちや先生、親も一時間くらい園庭に出てきて、先生がビニールシートをもってきたのでそこに座った。そのときも5~15分ごとに地震がきていた。他のお迎えにきていた親から、道路状況はひどくないといわれたので、揺れが収まってから帰った。

おうちに帰ってテレビをつけたら、津波の映像が流れている状況だった。水は出る、電気は点く、ということを確認した。それでも30分おきくらいに地震がきていたので、すぐ外に出られるように、息子に外にでる恰好をさせ、靴も枕もとに置いた。私もパジャマではなく、ジャージといったすぐに外に出れるような恰好をして、ランプやラジオなど避難グッズを用意して寝た。緊急時速報ってものがあるんだけど、携帯でぶーとなるのね。あれがずっとなりっぱなしというほどではないけど、大なり小なり頻繁に地震が来る状況で、三日間、靴を枕元に置くような状態で寝ていた。

### ■避難について

状況がだんだん落ち着いてきて、原発に直撃した、とテレビでいっていたから、落ち着いてすぐ（避難を考えた）。原発から出る放射能は、あぶないと分かっていたから。でも私の住んでいるところから原発まで170キロあるのね。ここだったら宗像から水俣ぐらいの距離。だいぶある。170キロくらいあるのだから一見大丈夫と思うけど、放射能は素粒子で目に見えるものではないので、もしかして風に乗ってきたらどうなるんだろうと思いはじめた。たまたま家に原発は危ないですよっていうジャーナリストの本があったので、それを読み返したりしていたら、なんかこれテレビで大丈夫とかいっているけどやばいんじゃないか、と思ってた。

震災が終わってから、幼稚園の友達が鹿児島島にいくって言い出して、それはやっぱりちょっと危ないからって。主人の実家がこっちにあるからじゃあ福津に行こうかなって3月18日の金曜日に思って、一時避難をした。テレビと本の情報が違って猜疑心が芽生えてきて、やばいんじゃないかと思った。子供も小さかったので、とりあえずこっちにきた。3月の避難のとき持ってきたものは、2、3枚の服。主人の実家に1カ月くらい世話になった。いったん群馬にもどって、6月から本格的にきた。必要最低限の家財道具を車に詰めてきたって感じ。

### ■経済状況について。

震災前、正規ではないけど、問題のある子供のケアの仕事をしていた。お給料は月に7~8万円。それも辞めたのでなくなった。主人の給料の半分、毎月12~15万仕送りしてもらっているが、足りないときもあるので、そのときは貯金の切り崩し。支出は、衣食住と普通の生活。幼稚園の費用など。もともと抱えている家のローンとこちらのアパート代。1つの給料が半分になった。

就職、職の見つけ方については、（これから就活をする）教育大生の前では言いたくないが、（自分は）学校の先生をしていたのでパソコンができる。それで九大や教育大などの研究室の補助の仕事を探していたが、子供が小さいし、保育園とか入れるとなると、

またいろいろお金がかかってしまう。幼稚園の時間帯で大学関係の仕事はなく、先生も時間的な制約がある。息子が通っている小学校の近くの農家で、今年の6月くらいに、いま収穫のお手伝いの仕事がある、なにかあれば、仕事が休めるなどの話を聞いた。フレキシブルな雇用形態だったので、今はそこで仕事をしている。経済状況による生活の変化は、レジャーがほとんどなくなったこと。外食や温泉に行くなどはめっきり減った。

## ■家族の状況

生活リズムの変化。こっちに慣れるのが大変。また、東京・関東からの自主避難者は少数で孤独感がある。こっちにきて放射能など、本当に大丈夫なのかという気持ちがあった。なので、この土地が大丈夫なのか土壌調査してほしいというほどの気持ちで暮らしている。ごはんも安心して食べられない状況。でも、関東に比べて大丈夫ということが分かって安心した。表面的な生活リズムに変化はあまりないが、内面はやっぱりいろんな葛藤があって、いろんなことを考える。

子どもは、幼稚園の年中さん。環境になじむ、友達をつくろうとがんばっていたが、幼稚園に行きたくなくなったり、東京を懐かしむ時期はあったが、いまでは普通に学校に通っている。主人に関しては、マスコミや大手の新聞などを信じている様子。夫婦間で意見の相違はあるものの、距離の関係もあって議論することはない。普通に仕事をし、月に一回子どもと遊びに群馬から来る。

避難した当時、父の存在は正直必要なかったが、子どもが成長してくると、自分自身がジャングルジムで遊んでも木と一緒に登ることはできないので、父親の必要性が出てくる。避難場所になぜ都心部ではないところを選んだのか。(夫の)実家の福津もそうだが、館林は東京の台所と呼ばれ、農村風景がある。見た目の生活状況に変化がない。

九州に来て一番不安なのは、どこが汚染されているのか、ということ。私の親戚は関東で、義理の妹に出産するのは関東ではやめた方が良くと言って、佐賀の鳥栖のほうに避難してもらった。商売をしているので、おじお婆には避難するように言えなかった。申し訳ない気持ちがあるので、あまり言わないようにしている。主人の両親は、私たち母子がなぜこっちに住んでいるのかよくわかってないと思う。

## ■支援について

自主避難してきたので、公的な支援はない。今の制度は、適用できないということ。欲しい支援は、就学支援。1つの給料で二世帯を維持するのは厳しい。給料が半分になるのは、ひとつの家庭にとっては大打撃になる。自己決定でやってきたので「そんなあなたの勝手でしょ」と言われたらそれまでだけど、そういう支援があると助かる。特に子供のお金に関してはこれからだから・・・

「避難者なんですよ」といったら「大丈夫？大変なんですすね」と返してくれるのは素敵な支援だが、物理的な支援でいえば就学支援とか、たとえば、生活に困っている人がいれば、水道・光熱費がただになったり、家賃の助成などがあったら助かる。私たちは自主避難してきた身だから、こういうこと言うのはあれかもしれないけど、でもそういうことがあったら・・・たとえば、経済的に苦しいから、福島とか避難元に戻りたいけど戻れない、そういう人たちにとっては、ありがたい支援なんじゃないかなと思う。

## ■福岡にきてから

子供の健康がある一定程度には保たれる環境にあるということ。放射能は、難しいかもしれないけど、しきい値がないっていわれているのね。あなたが10で大丈夫でも、彼にとっては1でも危ないかもしれない。でも、リスクが減ったということは喜ばしいことで、私はすぐ2011年の6月にこっちに来ちゃったから、なんともいえないけど、本当に子供のことを心配して、放射能の影響が怖いな、と思っているから関東のものが買えない。だったら西日本の食材となるのだけど、(関東にいたら)手に入らない上に、関東産の3倍とかしちゃうわけ。デパートはもっと高い。こっちでは一袋50円とかで安く買える。そういった意味でストレスが減っているのはありがたい。

不便なことは、コミュニティ。コミュニティというほどではないけど、原発や放射の関連の講演会などが開かれたときにそこに行くと、同じ立場の人と出会うので、「メアド交換しない？」といった具合に知り合いになる。そういった積み重ねで広がっていている。自己決定で来たから、行政にどんな人が避難してきているのか、などは聞けないし、講演会に集まって、どこからきたの、子供だけ、絶対避難者だよねって、いったひとたちとメアド交換したりして、仲間を増やし、自ら講演会を開くなど避難者を通してつなげていっている。

福岡の方言はわからない。言葉の壁。若い人たちはいいんだけど、50、60代の人に早口で方言を話されると、「とっと」、「ばい」とか、純粋な関東人なので、テレビのニュースなどでイントネーションの違いなどが気になる。地域性になれるのが難しい。福岡市なら良い意味でも、悪い意味でも隣を気にしない。宗像や福津はどちらかといえば、都会というより田舎なので、なにかしても都会では気づかれないが、田舎だったら注目される。

自分は、がんがん(避難者)であることを言うタイプ。新たに来る避難者に肩身の狭い思いをさせたくない。大震災のことを風化させたくない。言わないと・・・。福岡の人からは「大変でしたね」と声をかけていただける。どのように受け入れてほしいかという、まずは、避難しているひとがいるとわかってほしい。

生活上の困ったことの相談については、子供の悩みを相談するのは同じ子供を持ったお母さん。医者に言ってもわからない。行政に言ってもわからない。経験した人じゃないとわからない。2、3年後、子どもが病気になってから避難してくるパターンの人たちが出てくると思う。避難先に同じ立場の人がいれば気持ちは落ち着く。

今後の生活については、帰れないので帰りません。農業の手伝いの収入で、やっていく。

「保養」って言葉知ってる？子供が外で遊べないのは異常な状況。子供が遊べる場所があってくるといいな。それから原発を気にして、子供に体育の授業をうけさせない、給食ではなく弁当などを持たせるという家庭がある。親も子供も窮屈だから、ゆっくり保養できる場所が福津や宗像にもあってほしい。

今は、避難元の友達との交流はない。玄海原発については、あそこもいつどうなるかわからない。もうここが爆発したら日本には住むところがない。北海道くらいか。空港が近いので、海外に行くことも考えている。200キロでも300キロでも逃げたい、と考えることはわかってほしい。

ふわりネットワークがやっていることは、避難者同士のつながり。とにかく悲壮感や

苦勞が避難者にある。ふわりネットワークを通じて広くつながるので、同じ立場の人とつながることで安心感が得られる。広くゆるくつながるっていう感じ。あとは、子どもの健康についての活動。避難者の方が、一番必要としていて、一番心配しているのは、子どもの健康とか甲状腺。原発事故で、ヨウ素っていう物質が飛び散っていて、それを吸ってしまっている。赤ちゃんの知能指数が低いとか、体が弱いとかいう状態になるかも知れない。放射性物質はどこにでも溜まり、その後、なにが起こるかわからない。避難者の気持ちは避難者しかわからない。だから避難者の受け皿を作りたい。

水俣病やホームレスの患者を無料で診断してくれる千鳥橋病院が、無料で甲状腺の検査をしてくれた。困ったことがあれば病院側から働きかけてくれる。困ったことはたくさんあるので、良い関係を維持できたらいと思っている。これからも検査が無料でできるのを維持したいので、その働きかけもしているところ。



## (7) Gさん

震災時、東京は震度5強で、食器が落ちてガラスが壊れる程度で家が壊れることはなかったです。当時の報道を思い出してもらったら分かるんですけど、ただちに人体に影響はないという報道が繰り返されただけだったと思うんですね。ニュースの報道だけ見るとそうなんだけど、たとえばフランスやアメリカとかもそうですけど、自国の国民には放射能の範囲外に出ろと言ったりとかしてました。地震が起きた時はたまたま母と子どもと上野動物園にいて、家に帰ろうとしても、バスは長蛇の列で、乗るのに1時間、乗ってからも大渋滞で1時間待ちで、結局ベビーカー押して子供と歩いて帰ることになった。母親が神奈川の大磯に住んでいたのが、余震が頻繁に来るのでみんなで大磯に行きました。

3月の15日、主人のほうにメールが来て、東京にも放射能が来るから窓を開けないようにというメールでした。それまでに、千葉県の方で化学工場が爆発したというチェーンメールもきたりして。放射能のメールもチェーンメールかと思った。でもいい大学を出た人からだったから、どうなんだろう本当なのかもしれないと思い心配だからちょっと離れようかってあわててホテルを予約して、小田原から新幹線で京都や友達を頼って神戸とかにもいきました。まあその時いつまでこういう生活なのかって思いました。

とりあえず一週間いて東京の新宿に帰ってきたのが、3月21日だったかな。ちょうど東京都内で引越そうとしていて、物件決めようとしていた時で、万が一、東京が汚染されていて、逃げざるを得ないと考えたときに、ローン組んでここに住んでいいのかなと考えた。放射能が危ないという意識もなかったから、子どもが寝てからインターネットで調べることにして。世界各国で日本より放射線量が高いところがいっぱいあって、もともと放射線を出す地盤がある事も知った。でもそれは人間が対応して生きてこれた。でも人工で作った放射線にどれくらい耐えられるか、私にはわからなくて。

最初は何シーベルト以下なら健康に影響がないっていう政府の発表から、買い物の外出も何分以内なら大丈夫って馬鹿みたいに計算しながら生活してた。子どもに外遊びも

させないようにしていた。自分でガイガーカウンター買って測ってました。人工の放射線は違うんじゃないかと気が付いたときに、幼稚園も始まってないし、決めかねてた引っ越しをやめて、東京を離れたほうが健康面ではいいかなと思った。

どこに移住するのかを決めるために手掛かりとして、まずはとりあえず面白い幼稚園があるところをターゲットにして四国や鳥取も見てみました。でもぴんと来なくて。原発がない沖縄はどうだろうか？もたもたしてたら意味がない、とりあえず一か月だけでも東京を離れようと石垣島に行ってみた。1か月居住してみて、母子でやっていく自信はついた。けれど、旅費が高い。米軍の問題もあるので、沖縄はやめて、交通の便もよく、より原発から離れたところって思って福岡に来た。

大変だったのは、東京にいる時点で放射能のことを心配してる人と、全く心配してない人がいて、それまで普通に仲良くしてた人でも、一緒にご飯や外遊びを断るのがつらかった。やっぱり自分が気にしすぎている人間に思われるのかなあと。福岡に来た時も、同じように避難してきた人とは話しやすいけど、もともと住んでる人に「東京から来た」というと「えー」と言われたり、東京って危ないの？って言われたり。東京は安全っていう政府の発表があるから、みんなそれを信じているし、そこが一番大変。移住は自分で東京を危険なのではないか、こどもには、と思い判断してやったことだから自己責任となっているけど、それは本当は国の責任だと私は思ってる。

最初、福岡のどこにしよう、もう子供は三歳だったし、車もなく、見てまわって決めるのが難しかった。結局、ただ一人の知り合いを頼りに決めました。その人は、子ども劇場っていうお母さんたちが子供を豊かに育てようっていう子育てサークルの人だった。だから孤独になることはなかった。福岡は避難する人が多いから、そういうママたちのグループ「ママは原発いきりません」という団体とのつながりがすぐにできたり、近くに避難してきた人もいたから恵まれたのかな。

それまでの自分の生き方が完全に変わった。何となく仲のいいと友達と根っこで仲いい友達は違うじゃない。根っこで仲いい人には福岡にいることも話せて応援してくれる。でもそうじゃない人には言わずに来ちゃった。いちいち意見を戦わせたり、相手の生き方を否定したりもしたくないし。だからなんていうかな。今まで東京で生活していた時の人の流れとは、完全に離れてしまったというのを時々思うね。安全なら戻りたいけど。やっぱり事故がきっかけで気づいたことがいっぱいあって、自分が今まで何も考えないで生きてきたと反省もした。もっと早くに気づいていて（原発を）止められていたら、と思う。電気の恩恵とか経済優先の生活に何の疑問も抱かずに贅沢三昧してたから。原発事故は自分も含めてみんなの責任だと思う。今までの、何の疑問も持たずに生活してきたところに戻れるのかって言ったら違うかな。

仕事はしてない。もともとダンスの仕事をしてたけど子供ができてなかなかできなくて。今たまにワークショップなどをしてる。長男5歳は幼稚園に通っていて、のびのびと楽しそうに生活してるからよかったな、と思う。東京にいたら絶対できない生活だから、山も海もあって。月に2~3回夫が来る。公園に行ったり。子どもは、最近はなくなっただけど、一時期さみしそうにしてた。パパいつ帰っちゃうのって。理解したのかな、今は。

子供はパパともっと居たいとか、主人も子供や私と暮らしたいと常々言ってるけど、子供の健康第一という点で夫婦の意見が合ってるから、今は、これが一番いい方法だと

納得はしている。今のところこっちに夫が来る予定はない。仕事が特殊で福岡では見つけにくいので。ちなみに当時の空間線量を自分で調べていたカレンダーのメモも残してて。(手書きのメモなどを見せてもらう)

国がどうにかしてくれたら、って思うことばかりだけど、まずすべての今の土壌の調査をしてほしいかな。汚染された土はどうなっているのか、細かいところまですべてというのはわからなくて不安。空間線量が下がってるから安全ということになっているけど、たとえばスーパーでも何ベクレル出てて、それでも買ってくれる人は買ってくださいって表示が出ればいいな、と思う。今は市民の力でやってることばかりだから(公的にきちんとしてほしい)。事故がなかったことのように生活するんじゃないくて、放射能がここにはこれだけあるよって明確にしてほしい。その上で、選べるようにしてほしい。



## (8) Hさん

——まず、避難直後の様子について伺います。避難前に住んでいたところと、その場所の被害状況、いつ避難してきたのか、なぜ避難してきたのかを教えてください。

はい。福岡に避難移住したのは2011年の7月です。当時8歳の小学校3年生の子どもと2人で、夏休みに入ったタイミングで東京の東村山市から引っ越してきました。旦那は転勤願を出して、それがまだ決まってない段階でしたので、4か月ちょっとの間、家族ばらばらの生活でした。その年の12月に旦那の福岡転勤が決まり、またこちらで家族一緒に住むことができました。

以前住んでいたところの被害状況は、震度5強で、そのときは家にいました。ものすごい大きく長い揺れで、家の倒壊を恐れて外に出たんですが、隣の家の子供がアメ車が駐車場から道路に出てくるんじゃないかと思うくらいに揺れていました。電信柱とかも大きく揺れて、道路も波打っていたので、気がついたら恐怖で道路にしゃがみこんでいました。うちの地域は近くの家が倒れたりとかはありましたけど、家の中めっちゃくちゃになるっていう状況ではありませんでした。

なぜ避難をしてきたかは、そうですね、東京での被曝防御生活に限界を感じて、子育てをしていく場所じゃないと確信したからです。震災直後、原発の爆発をテレビで見ながら、これはただ事ではないと原発、放射性物質、チェルノブイリ事故などについて一から調べ始めました。そこで、あの爆発を起こした福島第一原発が当時テレビで見ている自分たち東京のための電気を作っていることや、地震大国日本の上にあれだけ危険な原発が所せましと建っていることの恐怖を初めて知ったんですね。毎日専門家の資料を読んだり、ユーストリーム(インターネット中継)でやっていた東電の会見を見たり、いつ寝てるのかわからないくらい毎日明け方まで、TVやパソコンつけっぱなしで少しでも情報収集をすることに必死でした。地震や原子炉の温度や圧力、海外発信の福島原発からの風向き予測をチェックするのが日課になっていました。いつでもすぐ避難できるように重要な情報を手書きのノートに書き写していましたね。

そんな必死な状況なのに、影響力を持つTVや新聞からは正確な情報がまったく流れてこなくて、TVではバラエティーばかりでした。原発が爆発して猛毒な放射性物質が空を舞っているときに東京のTVでは、“計画停電で電車が止まる？！”のニュースでもちきりだったんです。放射性物質拡散予測 SPEEDI も日本は国内に公表せず、黄砂や花粉飛散情報をのんきに流していました。放射能雨がふり、韓国が全学校を休校にした時も日本は“騒ぎすぎ！”と韓国を非難していましたし。それに加え3月は“100ミリシーベルトの安全基準”の一点張りで、4月に初めて“1ミリシーベルトの基準”という言葉がTVからやっと聞けるようになりました。が、3月に比べあまり原発を取り上げなくなっていて、爆発してあたかも事故は終わったような感覚を私の周りの人や友人、家族は持ち始めていました。日本が国内に発表しないドイツやノルウェー放射性物質拡散予測をみて私が家族や友達に、“今日は風向きがこっちだからなるべく外に出ないで、もし出るなら長袖来て分厚いマスクして”などの警告は全く理解してもらえませんでした。桜が満開の気持ちがいい春でしたから、みんな公園で子供をつれてお花見をしていました。私はそんな日本の中において違和感と不安と悲しみと恐怖でいっぱいでした。

ちょうどそのころ、福島の子供の為に20ミリシーベルト撤回のための抗議があり、インターネット中継を一人で泣きながら見ていたんですが、TVではバラエティー番組、周りの友人家族は“20ミリシーベルトって何？”とゆう状況でしたから、その異常な日常に、ものすごい温度差と、疎外感、これではいけないなどもんもんと考える2ヶ月でした。最も違和感を覚えたのは、その“20ミリシーベルト撤回署名を書いて”とイギリスにいる日本人の友人から頼まれたことでした。嬉しかった反面、衝撃でした。日本国内で起こっていることをほとんどの日本人はたぶん事態を把握しきれていなくて、有事ってことも理解できていない。外国にいる人のほうが情報を得ている。大きなショックを受けました。

それは政府の安全キャンペーンが成功していたからなんですね。事故後一年間ひっきりなしに“100ミリ・シーベルトまで大丈夫、直ちに影響ありません”“デマに惑わされないように”キャンペーンから始まり、“原発が止まっているから計画停電しないと電気足りなくなる”キャンペーン“汚染されていないのに風評被害で困っているから食べて応援しよう！”キャンペーン。。。“ガレキを広域処理しないと復興できない”キャンペーンとそして今現在行われているのは、“原発再稼働しないと電気足りないから生活守れない”キャンペーンですね。今は九州も原発は止まっているので私たちが使っている電気は原発からではありません。止まっても現に足りています。まあ、TV新聞がいかに日本人に影響力があって、政府がウソつきで、国民の命を守ろうとしていないことに気づいたので自主避難を決める大きな理由になりましたね。

あとは、東京での放射能防御生活に限界を感じて決めました。呼吸や飲食による内部被ばくのすさまじい恐ろしさを知ったので、東京にいる間、事故から4か月ちょっとの間、徹底して子供と旦那に分厚いマスクをさせて、夏でも長袖長ズボン、帰ったら洗濯物はすぐ洗濯、すぐお風呂、給食はお弁当に変えました。3月4月は窓を締め切り、外で遊ばせませんでした。親や兄弟からもキチガイ扱いされました。夫には転勤願いを出させて、家族バラバラになっても福岡に移住してきました。全て子供を東京に既に降ってしまった大量の放射能から守るために必死でしたね。私の場合は、一番の理解者が幸い夫と子供だったので協力し合い乗り切ることができました。でも毎日の食材だけ

は本当に苦労しました。北海道から愛知までの食材は避けていました。ゆるい国の基準どうこうの前に、もう降ってしまった放射能の量を見てから、北海道から愛知までの食べ物はやめようって思って。関東以东のものしか手に入らない東京では食べるものがありませんでした。宮城、千葉・茨城・群馬・栃木、神奈川、埼玉、東京、どこもホットスポットが点在する汚染地ですから。特に生野菜が西のものは手に入らず、アメリカ産のブロッコリーかたまに手に入る高い京野菜を食べていました。毎日のスーパーでの食材選びが苦痛でしかたなかった。スーパーに行くのが嫌で嫌でしょうがなくて。その生活が耐えられなくて。食材選びも防御生活も先を考えたら東京での子育て限界を感じたので、うん、もう暮らしていけないなあって。。。

九州に移住して初めてスーパーに行ったとき、豊富な九州産野菜を一つ一つ手に取りながら、涙があふれてきました。買い物かごを左手に下げて右手に野菜持って泣いていました。安全な食材、安全な水、安全な空気、子供が遊べる安全な土、今まで当たり前に入っていたものが、どれだけ貴重で、どれだけ尊いものかを知って、すべてに心から感謝しました。

——福岡にも近くに原子力発電所があるのに、なぜ福岡を選ばれたんですか。

そうですね。東京はどこの原発からも 200 キロ以上離れてるんですよ。大都会が一番守られてるんですね。原発って人口が少ない所に作られる法律になっていますし。宗像は 70 キロとかで、もういざ事故があったらアウトな場所なんですけど。そしたらもう、逃げるしかないですが。チェルノブイリのことを調べていたので、まず 1000 キロっていうのが自分の中にあっただすよね。で、やっぱり旦那の仕事とか、こっちに来て仕事を探せる場所っていったら、ある程度、栄えてる場所じゃないとダメって思って。その中で、大阪とか京都を考えると、距離的にまだ近かったんですよ、自分の中で。それでやっぱり 1000 キロ離れた距離で、北海道か福岡かって思うと、福岡かなって。九州の中でも悩んだんですが温泉好きで、熊本や大分も住みたかったんですけど。やっぱり、転職しなきゃいけない場合を考えると。福岡の方が仕事が見つかりやすいのかなっていう漠然としてるんですけど、そう考えました。

なので玄海原発、川内原発は、覚悟して来ました。もう 2 度と原発事故が起こらないことを願って。東京での苦痛な防御生活、それか諦めて毎日汚染地のものを食べ続ける食材のリスク、それから福島から近いので、まだ放射能が出続けてる中で毎日それを吸って暮らし続けるリスク、それらの健康被害を考えると、今を人間らしく生きるためには移住しかなかった。

福岡県に避難してる人に、福岡市に住んでいる人が多いのは、福岡市が栄えていて、東京とほとんど変わらない感覚で住めるのが 1 つと、あと、空港が近いんですよ、福岡って。だから、なんかあったらすぐ飛べるように、みんな空港の近くに住んでますね。私も春日のほうも探したんですけど、せっかくこっちの福岡で自然が多いところに来るのに、高速道路があつたり、空港が近くてすぐうるさいし、自衛隊の基地も近いし、っていうのを考えて、綺麗な海が近くて、田んぼだらけの自然豊かな宗像市の物件が気に入りました。

——避難されるにあたって不安だったことと、避難を決断できた要因はなんですか。

決断できた要因は、もう、生命にかかわることなんで、命や健康、将来を考えて、生きるって思った時に、もうここでは暮らせないって思ったので。不安もいっぱいありましたし、本心では行きたくないのに、引越しの話を進めるのはすごく大変でした。住めないって頭では分かったけど、動きたくないから・・・福岡の物件探しの下見旅行の時も、じゃあ今もし住むんだったらここにしようっていう、そこに決定とかじゃなくて、今考えるんだったらこの物件だね、どうするっていう感じで、帰ってからまた決めようとゆう感じで。一步一步、こう・・・やだねやだねって、そんな中で決めました。

——福岡に持ってきたもの、福岡で必要になった物は

ほんとは全部捨ててきたかったんですけど、被曝を防御する観点からいくと、汚染地の物を運んでくるのは良くないので。家電とかは、買い替えるお金もないし必要なので持ってきましたが、掃除機は買い換えました。ああいう吸い込むものは特に危険なので。あとは・・・とにかくお金がなかったんで、持ってたくなかったけど、しょうがなく生活に必要なだから持ってくるっていう感じで。冷蔵庫とか自転車も、持ってきましたね、足がなかったの。車、あとで・・・買いました。車なかったんですよ、向こうで。こちらでは必要でしたね。イメージでは、スーパーも近いし、毎日の生活には困らなかったんですけど、なんだかんだ車必要でしたね。

——経済状況についてお伺いしたいんですけども。収入や貯蓄が避難前後でどうなられたかなどお聞かせください。

そうですね、東京から福岡転勤によって、何万か下がりましたね。手当ても少なくなりました。うーん。そうですね、収入が減った分、家賃もすごい安くなってますね。前が、9万8000円の戸建てだったんですけど、今は5万4000円のアパートですね。住むところが変わりましたね。アパートになっちゃって家賃も安くなったけど、その分給料も安くなって。それから食材もすごい安いから、生活費は安くなってんですけど、・・・車のお金とかも増えて、うーん。どうなんだろう。でも・・・出費は多くなった気がします。旦那と別々の生活していた期間が一番大変で、他の避難者の方もそうだと思うんですけど、別々に暮らしてる方って二重生活なんですね。こっちでも借りて、あっちでも賃貸かローン払い続けてるっていう方がほとんどだと思うんですけど。賃貸か持家かで全然状況が違います。その4か月は大変でしたけど、今はまあ、あるお金でやっています。

——旦那さんの働いている様子を聞きたいです。

うちの場合はほんとに、ありがたく転勤が決まったっていうのは稀なケースで。みなさん仕事の問題と、家のローンで旦那さんの避難ができないケースが多いです。うちの場合は、仕事がまずあったとゆうことがすごくラッキーでした。変わったことと言えば、営業で色々回る時の範囲が広くなりました。一日で県を何回もまたぎ、運転する時間が

莫大に伸びました。東京よりも朝が早く夜が遅くなりましたね。同じ仕事、会社は変わってなくてもけっこうな違いがありました。

——お子さんの相手とかもなかなか難しいですよ。

日曜日が休みなので子どもとのコミュニケーションはとれています。毎日夜ごはんを一緒には食べれないですが、朝は一緒に。

——家族の様子についてなんですけど、生活リズムの変化で大きく変わった点や子どもさんの不安や学校生活、ご主人の仕事や生活についてなど、お願いします。

子どもは、こっちにきてすぐに九州弁になりました。最初、3年生4年生は結構苦労してたかな、学校の違いとかに。今は5年生になって楽しくやっています。学校は衝撃的なことが多くて。運動会のとき飲酒とか、喫煙とか普通にしている、ものすごいカルチャーショックを受けました。むこうで当たり前にずいぶん前に禁止されていることがこっちではまだ許されている、そういうギャップが激しすぎました。その、運動会含む校内で喫煙を許すのは、根本的なところからも許せないの、言いました。次の年からはプログラムに注意書きと運動会中放送が入るようになりました。その、自然がもともと好きなので、こちらに引っ越してきての不便さ、遊ぶところが少ないとかそういうのはどうでもいいんですが、学校とか、例えば人の考え方、地域性の価値観の違いとかにすごく、ショックを受けました。ええ、こんなことも言わなきゃいけないのかって思って。向こうではまずないですよ。校内禁煙はもう常識なはずなんですけど、そういうのが、言われて気づきましたみたいな感じで。ホントにショックでした。

——地域のつながりやこちらでの生活はどうか。都会とは違いがあると思うんですけど。

もう私はそれがすごく悩みでしたね、私自身。子どもと旦那はもうすぐ自分の生活に慣れましたが、私自身はそこが無理で。引っ越してきて地元の方と接する機会は無かったんで、最初一年くらいは東京からの避難者の人たちとばかり関わっていたので、まったくの観光気分で宗像に住んでいたんです。それでひょんなことから地元の家族経営のお店で働くことになったんです。そしたら、すべてにおいて根掘り葉掘り聞かれるので毎日苦痛でした。東京ってほんとに、ノータッチっていうか、聞かないんですよ、そこまで人の中にずけずけ入って。だから、そこが一番苦痛に感じました。仲のいい友達以外しないような話を、何でもかんでも聞いてきて、そして噂話のネタとしてぺらぺら誰にでも何でもしゃべる。もうそれがうんざりしちゃって。そのギャップがすごかったです。無関心な世界から、特異な職場ですが、いざこう働いて、職場になって、何回も何回も顔を合わせて、すごい狭い世界の中に入っちゃったって思いました。でも他の人はそこまでそんな色々聞いてくる人はいないから、きっとその人達の性格なんです。震災や避難については、私は話す義務があるって考えているので、そのことは色々聞かれても話してきたんですけど、例えば旦那の給料とかをいきなり聞いてきて、そういう

のがちょっと・・・考えられない。ほかの福岡で出逢った皆さんはすごく温かい人ばかりです。いろんなご支援に感謝しています。

子どもはですね、自然にこれだけ囲まれてる中で暮らせてるので、休みは旦那と釣りに行ったりとか、あとは学校帰りにカエルだの虫だの取って帰ってきたりとか、四季に触れて、ホントに今楽しんでいます。前にいたところでは体験できないこと、例えばこの時期になったからミカン狩り行こうとか、蛍見に行こうとか、潮干狩りや、夏は海がすっごくきれいでシュノーケルもできて、温泉が近くにあって、贅沢ですね、やっぱり。むこうできれいな海行こうと思うと、2、3時間は車走らせないとないんですよね。天然虫もこんなにたくさん自生していることに本当に感動しました。自然が近くて、大いに楽しんでます。

あと違いといえば、東京は公園がすごいいっぱいあるんですね。公園と、あと児童館がいっぱいあるので、雨の日も、晴れの日も、外行って自分で5時に帰ってくるっていう生活ができてたんですけど、こちらでは公園が少なく児童館もないので、子どもたちは学校とかそういうところで遊んでますよね。雨の日は誰かしろのお宅にお邪魔して遊ぶっていう感じじゃないと遊べない。それがね、ちょっと。児童館は欲しいなって強く思います。他の避難者の方とも話してたんですけど、学校でやる土曜学校みたいな、地域の方との触れ合いの遊びの授業がありました。いいシステムは、どんどん取り入れてほしいなって思います。こっちもコミュニティーセンターはあるんですけど、遊ぶスペースがないんですよ。雨の日でも子どもがひとりで行ってほかの学校の子とも混じって遊んで帰ってこれるという。児童館はそこがいいですね。色んなところから集まるので、子どもの中でも世界が広がります。あとはこっちに來てから外で遊ばせるのが少なくなった。晴れの日には外で遊んでくるっていうのが、こっちに來たら逆に、こんなに自然いっぱいあるのに、ないなと思って。みんなDSやってたりとか。あんまり外で遊んでない子が多いかもしれない。公園は必要ですね。それから、自転車も少ないんですよ。子どもたちも自転車にあんまり乗らないし、ちょっとそこ行くのも皆さん車でいきますよね。町の自転車屋さんが近くにないのも困りました。

——勉強が遅れることはなかったですか。

勉強はやっぱり違いますよね。宿題の量とかが全然違います。少ないです。うん。むこうの友達の話聞いていても、違いますね。学校にもよると思うんですけど、授業によって先生違ったりとかもしています。

——家族同士の関係は変わりましたか。

強くなりました。家族の仲もさらに良くなりました。子どもと父親も私も離れて暮らした分、お互いを思いやったり、一緒に暮らせて一緒にご飯を食べれることに感謝したり。変わりました。子供はよくお手伝いを進んでしてくれます。震災後すぐお弁当にして、こっちに來てからもお弁当にしていますが、そのときからけっこう、校内でひとりだけだったんで、それを、自分だけ弁当で嫌だっていう気持ちもあると思うのに感謝して

くれてるっていうか…ありがたいです。

——親戚の方はどうされてるんですか。

兄弟は結婚してちっちゃい子供もいて、放射能の危険については伝えていましたが、何言ってもダメでしたね。こう…人の許容範囲があって…東京で家を買ってしまいました。母は私を震災直後はきちがい扱いしていましたが昨年、持ち家を売ってまで引っ越してきてくれました。旦那のお父さんお母さんも最初、私の行動に頭おかしくなったと思われていましたが。。毎日分厚いマスクしたり、暑い日も長袖着たりして、まず見た目がおかしいので、それで。でも私が引っ越した後に、そう気にして同じようなことをしているお母さんたちがいっぱいいる事をテレビで見たりすると考えがちとずつ変わってきたりして。最近では退職にあわせてこっちに引っ越してこようかな—とかも言ってくれているので嬉しいです。親戚はそんな感じですね。

——テレビで原発のこと、問題が明らかになったりしていますが、それでむこうの方はテレビの言ってることおかしいだろ、って思ったりしないんですか。

思っている人はたくさんいますが、国やマスコミが言っていることを大半の人は信じるので、そこにおかしいっていう目を持っていないと…無理ですよ。テレビもしくは新聞で大丈夫って言ってるじゃん、みたいな感じでふさいでしまう。どれだけ正しい情報に自分で調べてたどり着けるかっていうことが大事ですね。原発問題と被曝防御に対してのスタンスもみんなそれぞれ違うんですね。原発は反対しても、食べ物の汚染や東京はどうなのって考えると、大丈夫でしょという人。東京が安全かどうかや、そういう被曝防御っていう観点からすると…聞かないようにしてる人、考えないようにしてる人が大半で、いやあ、無理でしょう、東京を離れるのは、っていう人もいますね。人には何に重きを置くかという価値観がそれぞれあって、ストレスの許容範囲も人によって違うこと、緊張を保つタイムリミットもあります。友達や知り合いがいない他の場所で一から生活するのがまったく考えられない人や、東京でこう、食材を毎日ストレスを溜めながら選んで暮らすこと自体無理だったりすると…最初から何でも食べていたり…。だから、シャットアウトしちゃった人には何言ってもダメでしたね…。東京で、私が説得したり引っ越したりしてるのを見て考えを変えてくれた親友とかは、九州から食材を取り寄せて、食べていたりとか、私が送ったりしてできる限りのことをしています。

避難してきている人は自分で調べられる能力があったことと、あと判断力・決断力があつたこと。だから、どんなリスクを考えても、やっぱ命には代えられないということで判断ができる人じゃないとまず避難してはこれないですよ、自分の生活全部捨てて、ストレスが溜まって大きなパワーを使うことだから。

——一番助かったと思う支援と、足りていなかった支援や希望などについてお聞きしたいです。

一番助かったと思う支援は、避難者の数が福岡市などに比べてかなり低い宗像市で、避難者同士がつながるように、ネットワークや、それに対しての活動、自宅を開放して下さったり、いろんな方に支援していただきました。とても感謝しています。

足りていなかった支援は、移住後1年くらい経って、宗像市の家賃補助制度があることを知ったんですね。旦那と離れて暮らして、1番ダブルで出費があるときに、そういうのは…なかったんですよね。その制度を始めたのは避難者はものすごく助かりますが、受け付けの方がちゃんと把握していなくて実際に最近その制度を利用した避難者の方と窓口の方とで混乱があったみたいです…なので、まず市役所の方が内容を把握して受け入れ態勢をきっちり整えていただきたいと思います。

2011年の3月以降、まだ継続中の福島第一原発事故は、無数の人の生活や価値観、在り方を変えました。日本は広範囲を汚染してしまいましたが、九州は唯一風向きにより奇跡的に汚染をまぬがれ、日本の食材宝庫になり、九州は被曝者を保養できる貴重な保養地帯になりました。私は福岡の皆さんに、まずその現実を知ってもらいたいです。3年たっても収束などせず人の犠牲のうえになりつつ原発の再稼働についても、玄海原発から事故時甚大な被害を受ける100キロ圏内の福岡県民として、もういちどしっかり見つめていただきたいと思います。豊かな自然、おいしいお米、農業を失い、先祖から受け継いだ土地、そこでの生活、そして暮らす人の健康や尊い命までも奪った福島の事故を。そしてこれからもこの貴重な九州の安全な水、土、空気、そして未来ある子供たちの将来を守っていただきたいと思います。



## (9) Iさん

——まず、避難直後の様子についてお聞きしたいんですけど、避難前に住んでいたところとその被害状況についてお聞かせください

避難前に住んでいたところは東京葛飾区のマンションの7階だったんですけど、建物が丈夫だったんでしょうね。震度5だったんですけど、ちょっと小物が落ちたくらいで被害はありませんでした。ただお友達の家は冷蔵庫が倒れたり、食器棚が倒れたりとか、結構聞きましたね。

——福岡への避難の情報とかは、どうやって得られましたか？

最初3月に、東京の金町浄水場からヨウ素が出たっていうところから、本当は推測しなきゃいけなかったんですけど、私、それほど東京に放射能が降るとは思わなかったんですよね。ある程度大丈夫かなって。ただ一応ヨウ素が出たので、当時長男が10か月だったので、離乳食を作るのに水だけは気をつけていたんですけど。あと食べ物は千葉とか茨城のものしか手に入らないので。生協をとってたんですが、その生協からも結局、茨城産のものが配達されてくるんで、大丈夫かなあって思いつつ、食べてました。

5月の終わりに、当時1年生だった長女が学校から鼻血を出して帰ってきた時におかしいな—と思って。4歳の次女もよく咳をしていたし、私も夫も喉が痛かったの。それでインターネットで調べたら、共産党都議団が作成した東京都の放射能マップが見つかって、葛飾が $0.2\mu\text{Sv}$ 以上出ていたんですね。ここからここまでは年に1ミリシーベルトを超えるよって線引きがされてたんですが、葛飾はそこにあってまして。それを知って、「あ、この辺危ないんだ」って知って。そこからですね、いろいろと気をつけて生活するようになったのは。それまでは、ゴールデンウィーク中もやっぱり近くの公園には行って遊んだりしてたんですよ。気にはなるんですけど、遊ぶ時間を少なくすれば大丈夫かなってくらいで、遊ばせていたんです。でも、まだその時点では、九州への避難は考えていませんでした。

その時にまずやろうと思ったのは、なるべく西日本のものとか北海道のものを買うようにしました。大変でしたよ。スーパーを3軒くらいまわって、ここではアメリカ産の大豆のお豆腐、ここでは、たまたま大阪の野菜があったからそれを買って—ということをして。

でも、手に入りにくいんですよ。近所の八百屋さんに行ったら、千葉産のものしか仕入れていなかったりするの。旬のものじゃないものは、地方から入ってくるんですけど、旬のものはだいたい地元のものだし。それが大変でした。遠出して九州産の野菜を直売しているお店にも行ったんですけど、熊本産のキャベツが1個280円だったりとかするんですよ。ちょっと買うのを躊躇しちゃうんですよ。そこは、苦労しましたね。

小学校の給食では、群馬とか栃木とか千葉のものを出しているというのは分かっていたので、長女には牛乳だけは飲まないようにしてもらって。で、プールとかも迷ったんですよ。でも排水溝のそばで見学させられるよりは、入っているほうが安全だ—という情報があったので、プールでは端っこに寄らないようにとか。あと、道は真ん中を歩きなさいとか、排水溝の落ち葉を触っちゃダメとか。

放射能って動いてるんですよ。それで溜まるところがあるので、そういうところには近づいちゃだめよって。草むらには行っちゃいけないとか。事細かに子どもに言っていたんですよ。でね、学校から帰ってきたらすぐに上着は脱いで、ランドセルも玄関に置いて、家には放射能を持ち込まないようにさせて。で、家の中も掃除機は使わずに、毎日水拭きをして。それでも、結構あったんですよ、 $0.15\mu\text{Sv}$ とか。

— (線量を) 測られたんですか。おうちの中とか。

結局、ガイガーカウンターも買って、測って。そうしたらやっぱり玄関が高かったですね。最初は持ってなかったので、近くの幼稚園のお友達に借りたんですが、それも言わないんですよ、みんな。風が強い日は子どもにマスクさせて幼稚園に行ってたんです、初夏のころに。そうすると、「カゼ？」って聞かれて、放射能とは言いづらいんですよ。でも「カゼって嘘つくのな」って思って、「うーん。ちょっと気になるからさせた」みたいなことを言うと、そこで初めて向こうも、カミングアウトじゃないですけど、「そうよね、気になるよね—」って。

「実はね、測ってみたんだ」って言われて、それでガイガーカウンターをお借りして。

で、近くの公園を測ったら  $0.25 \mu\text{Sv}$  とか、結構高かったんですよ。砂場とかもね、 $0.3 \mu\text{Sv}$  とかあったりしてね。でも、みんな普段は放射能を気にしている雰囲気はまったくなくて、放射能のことなんて全然出てこないんですよ。だから実際、福島で今、放射能のことでもなかったような感じで暮らしているということを聞くと、すごくよくわかるんです。なんか、なんて言うんですかねー。日本人って、そういうことを言い出せない雰囲気があるんですよ。気にはなっているんだけど、言えないみたいな。

で、私、7月に子ども3人連れて北海道に行っただす、武田邦彦先生のブログで、保養について、放射能のない場所に2週間もいれば、それまで体内にずっと入り続けていた放射性物質が搬出されて体が元気になるということを聞いていたので、2週間くらい疎開をしようと思って。それでインターネットで探したら、**mama to mama** という被災地のママと受け入れママをつなぐサイトがあって、そこに「私は自宅の一室を提供できますよ」といった全国のボランティアのリストがあるんですよ。そこでちょっとお願いをして、北海道に行っただす。

そこには本当はもっと長くいるつもりが、一週間目くらいに東京から電話がありまして、夫から「母が甲状腺ガンで、危篤状態だから戻ってきて」と言われて、慌てて戻って。で、1週間後に義母が亡くなったんですね。義母は3月末くらいに甲状腺ガンを発症したんですよ。3月15日くらいに、ヨウ素がかなり東京のほうに飛んできてたんですよ。それって、やっぱり少しは原因があるんじゃないかって思うんですけどね。急に発症して、そのあと4月に切除して、でもまた結局7月に再発して、で8月に亡くなって…。

2011年の9月に葛飾区長と区民の話し合いがあったんですね。で、そこで葛飾区長に、「できれば、給食には西日本のものを使うように」とか、その当時すでに杉並区はゲルマニウム半導体検出器を購入して、給食の食材を調べるようになっていたので、「葛飾区でも、もし西のものを持ってこられないのであれば、測定器を導入してほしい」ということを、直接区長に質問したんですよ。そしたら、「福島県の塙町というところと姉妹都市になっているから、福島のものとか、東北のものを入れないっていうのは風評被害につながるからできない」と。事実の情報をもとに産地を選ぶことは風評被害ではないし、本当は農家のかたにはきちんと補償をして、子どもたちには放射能に汚染されていないものを食べさせるべきなのに。

結局、葛飾区は今でも放射能測定器を買ってはいないんですよ。今は、国から借りて、年に2回だけ測っているんです。意味ないじゃないですか、年に2回では。そういうことを今でもやっている区なんですよ。自治体のトップによってあまりにも差があります。

葛飾区は例えば空間線量を測るのも最初は1m地点しか測ってなかったんですよ。で、市民団体が言って、ようやく地上も測るようになったんですけど。お隣の足立区は2011年の7月頃から土壤汚染も測っていたんですよ。例えば公園があったら、滑り台の下にはどのくらいのセシウムがあるか、ベンチの下、ブランコの下はと。で、セシウムが検出されたら、全部マップにして区のホームページに載せていたんですね。でも、葛飾区は土壤を測っていない。測るように言っても、区はしなかったんですよ。それで「ああこの人(区長)に言ってもダメなんだ。この人は、子どもの命よりも経済優先なんだ」とってことを痛感して、もうここにはいられない、どこかに避難しようと思ったんです。

当時、瓦礫の受け入れを大阪が表明していたんですね。それで大阪は無理だなあと。それで、もっと西へって考えたときに、岡山が被災者の受け入れを非常に積極的にやっていて、罹災証明がなくても、自主避難でも、住宅の無料提供なんかをしていたんですけど、ちょっと東京からの便が良くないので。その後しばらくしてLCCが飛ぶようになったりして、飛行機代も安くなったので福岡にしよう。

ただ、玄海原発があるので、玄海の近くは嫌だから、もうちょっと東。そういうことを考えて、この辺を探して。で、下の子どもが当時4歳と1歳だったので、保育園優先で決めようと思っていたら、古賀市に玄米無農薬野菜の、添加物にも気をつけているいい保育園があったので、じゃあ古賀にしようということで、2011年10月に子ども3人と母子移住してきました。

—お子さんに変化はありましたか？

そうですね。次女がその時4歳だったんですけど、幼稚園の年少さんなのに「放射性物質」って言えてたんですよ。「放射性物質があるから雨に濡れちゃいけないだよ」って。それをこっちに来てからは私が言わなくなったので、彼女の口から「放射性物質」という言葉が出てくることはなくなりましたね。ただやっぱり、お友達が東京にいて、大好きだったんで…。こっちに来て、1か月くらいはよく泣いていました、「東京帰りたい」って。やっぱりパパとも離れて暮らすことになってしまったので…。

—その時は何て声をかけられてたんですか

うーん。「でも、東京にはね、帰れないんだよ」って。何て言ってたかなあ。まあ、抱っこして、「しょうがないねえ」って。

—今はもうお友達とかもできて

そうですねー。でも、やっぱり東京好きですね。幼稚園のお友達のこと、まだ覚えていたりして。ディズニーランドもあるし。それにうちは、おじいちゃん、おばあちゃん、叔母もみんな向こうなので、そういう意味では、う〜んっていうのはありますねー。子どもにとって外で思い切り遊べるって（ことの価値は）わかんないんじゃないかな。それよりも、そういうお友達関係とか、家族関係とか、そういうことのほうが重要な気はしますね。

—あの、ご主人はどのくらいの頻度でこちらへ

だいたい三週間に一度で。

—お子さんは寂しがりませんか

ああ、もちろん。最初はよく泣いたりしてましたね。駅へ送りに行ったあとで、車の

中で3人ともわぁって泣いたりして。

——今後、その、ご主人がこちらに来られて一緒に暮らすということは考えておられますか

うーん。仕事の関係で、難しいかなあってところですかね。できればね、こっちに来て一緒に生活してほしいんですけど。やっぱり、仕事の関係で。

——その、福岡に来られている他の避難者の方にインタビューしたときに、「よく自然があって食生活に困らなくてすごくいいんだけど、その、地域とのつながりが逆に強すぎて、知られたくないことも知られるから嫌だ」と言われていて、そういうことはありますか

まあ、詮索するのが好きな奥様とかもいますけどね。幸い、うちのところはみんな良くしてくれますね。最初に「東京から原発で母子で避難してきました」って挨拶したときも、「ああ、がんばってくださいね！」みたいな感じで。で、しかも住んでいるところが高齢化地域で、60%以上が高齢者なんです。で、そこに子ども3人で来たので、「賑やかになってよかったわー」みたいな感じで。ご自宅のお庭でとれたお野菜や、手作りのお惣菜を頂いたりとか。すごく可愛がっていただいているので、そういう点ではいいなと思います。

ただ、古賀市に来て思うのは、やっぱり公園がないんですよ。うちはたまたま、住んでいたところがよかったんですけど、葛飾では近くに自転車やゴーカートに思いっきり乗れる交通公園というのがあって、そこではポニーに乗れて、モルモットとかとも遊べたり、大きな遊具のある芝生広場もあって。ちゃんとボランティアの方がいて、「信号が赤になったら止まるんだよ」とか教えてくれて。土日になったらそこに行かせて、子どもたちを遊ばせてたんです。長女は学校から帰ると、そこでお友達とケイドロとかして遊んだりしたんですけど、そういうのが全くここにはないので、ちょっとその点がねー。もう、子どもが運動不足になってしまっ。小さい公園がちょこちょこあってあるだけで、ケイドロするにも不十分って感じで。学校から徒歩圏内のところにちゃんとした大きな公園があればいいなって思うんですけど、その点では古賀市は…。自然がいっぱいあるのに、土地もあるのに、なんでできないかなー？って感じですね。

子どもたちは雨が降ったら車でお母さん達が送り迎えしたりして。正直、運動能力は東京の子より低いんじゃないかって思うんですよ。うちの子も結局、学校から帰ってきたら近所に遊ぶ子が居なかったんですね。居ても道路や家の中で遊ぶって感じなんで、落ちたんですよ。運動能力が。昔は、大縄とか年少さんの時からできてたのに、今やったら、つかかかったりするから。だからその点で、やっぱり大きな公園がないということに、不満はありますね。予算の関係なんでしょうかね。

東京や愛知や長野など他の自治体では、「放課後子ども教室」というのがあって、学校で5時まで遊べるようになってるんですよ。学校を開放して、そこにちゃんと自治体から事業を請け負ったNPOの職員とかがいて、子どもたちは5時まで校庭や空き教室で自由に遊んだりできるシステムがあるんですけど、それが福岡にはないんですよ。

アンビシャス活動の中で週に1、2回やっているところはあるんですけど、それも、やっているところとやってないところがある。古賀市はやっていない。福津市や太宰府市は週2回開催しているというような、福岡県内の自治体間での差もあるし。

でも他の自治体では、週5日とか夏休み中もずっと開催しているんですね。子どもたちの居場所づくりということで、国も予算を出して積極的に推奨しているんだけど、福岡は「放課後子ども教室」の制度自体を導入していない。やっぱり学校のグラウンドとか使って思いっきりケイドロとかできたら、全然体力が違ってくるのになあって思うんです。

学校のグラウンドなんて、葛飾の学校の2倍くらいありますよ。すごく広いです。東京の運動会なんて競技する場所だけ手一杯で、保護者が座る場所なんてないんです。立ち見なんですよ。ここはものすごく広いのに、なんでもっと校庭使わないんだろうって。児童館もないしねー、市内に一つくらいしかない。学区内になかったら、子どもは一人で行けないじゃないですか。雨の日とか夏休みとか、PMの高い日に遊ぶ場所がない。行政の力がね、子育てに関して弱いなあって思います。

——例えば、その、子育ての面とかも含めて自主避難者に対する支援でもっとこういうものがあつたらいいなとか、逆にこういうものは満足してるっていうところはありませんか

ああ、でも、東京からの避難者には全く出ないんでねー。

——本当に何も出ないんですね

うん。何も出ない。っていうか、自主避難とも思われていないと思います、東京都には。勝手に出ていったと。

——福島とかから来た人じゃないってことですか

福島、岩手、宮城、茨城や千葉の沿岸部、いくつかありますよね、指定されているところが。結局それ以外は罹災証明がないから…。

——それって地域の差別じゃないですけど

だから私も、総務省がやっている自主避難者が登録できる制度とかあるんで、自己申告じゃないですけど、原発被害から逃れるために福岡に来たんだよってことを国に宣言するために、古賀市に登録しに行ったんですよ。そうしたら、「その資料どこにあるかわかりません」って最初言われて。だから自治体としても全然、そういうものがあるということも把握してないのが現状なんです。それで翌日にまた行って出してもらって。でも、私の友達も含めて登録は2件くらいなんです。だから、その制度があることも知られていない。

福津市は避難者の働きかけで、市役所の窓口では「避難者の場合はお知らせください」

みたいなのを出しているみたいなんですよ、今は。だから、そういったことも自治体に働きかけていかないと。自治体のほうも自主避難のことを把握していない。避難者っていうのは結局、震災からはしばらくはいたけど、半年くらいしたらみんな帰ったっていうのが、古賀市の考え方なんです。

例えば、大分県に避難した方が居るんですけど、大分県の場合は、県の福祉協議会の方が自主避難も罹災証明のある避難者も、登録した人みんなを、温泉ツアーに連れていってくれたり、クリスマス会をしてくれたりとか、そういう地元の人との交流会みたいなのをいろいろ積極的にやってくれているみたいなんですよ。そうしたことを福岡県はやっていないんです。自治体によって本当に差があって。大分県の場合は県営住宅の貸し出しも2年間無料でしていたみたいで。

でも、引っ越してきたとき、持ってきた電子レンジが、周波数が違って使えなかったんですけど、民間のボランティア団体の方に電子レンジをいただいたり、今も観劇のチケットをいただいたり、交流会を開いていただいたりしているのはとてもありがたいですね。

——なんか、根本的に文化の違いを感じることはありますか？

運動会で、小学校の敷地内で親がタバコを吸っていたこと。あれは、びっくりしました。門のところに喫煙所があって。あとね、車。徒歩5分とかでも、すぐ車に乗るでしょ？歩いている人が全然いないんですよ。

運動会で思い出したんですけど、東京での運動会の時、本当にすごかったんですよ。長女の小学校の砂場からは0.45 $\mu$ Sv出てたんですよ。その小学校での運動会で、校庭のはじっこのほうで、レジャーシート敷いて、母と夫と下の子2人と座って見てたんです。最後の運動会だからと思って。で、お昼ご飯も食べて、結局14時ぐらいに帰ったんですけど。帰ってきたら、足がすっごくだるくて。私だけじゃなくて、みんな。で、その後みんなで昼寝をして、本当にぐたーって感じで寝て。なんか放射能って、足から来るんですよ。地面に落ちているから、一番地面に近い足に来るんですよ。

チェルノブイリの子どものための支援をしている「チェルノブイリへのかけはし」という団体の方の講演会があったんですけど、その方がセシウムは下から来るということをお話していたので、ああこれだなんて。本当に足がだるくて、歩くのも重たいって感じで。で、「こんなところで裸足でピラミッドとか作っていて大丈夫なの？」と思っちゃって。しかもね、ちょっと風が吹けば砂が舞うじゃないですか。母も「疲れた。足がだるい。ちょっとこれおかしいよね」って。

でもね、うちの場合は幸い避難できたけど…。やっぱり避難者の中には旦那さんが避難に同意していないご家庭ってすごく多いんですよ。その、反対を押し切ってじゃないけど、まだ理解を得られないままに避難してきている方も結構いて。そういう方がいらっしやる中で、うちは…。義母が亡くなったというのもあるので、夫は「避難したほうがいいんじゃない」という派なので、その点では良かったなとは思ってますけどね。夫もこの間までは、鶏肉とアメリカ産のブロccoliしか買わなかったみたいなこと言ってたんです、野菜が手に入らないから。「じゃあこっちから送るから」って言って。で、この間来たときは自分で産直所で野菜を選んで、20kg分くらい送りました。

——やっぱり大変ですよ。そういうふうには送りしたり、こっちに来たり

やっぱり、往復の交通費が大きいですよ。

——そういうのって、全部切り崩しですか、貯金の

うん。とりあえず引っ越し費用は貯金の切り崩しで、なんとかりましたね。

——結構カツカツな状態ですか

そうですね。貯金までする余裕はないです。まあ、しょうがないんですけど。

——今って、お仕事とかはされてるんですか

はい。一応、自宅で。

——お仕事はどちらで見つけて来られたんですか

いえいえ。もともと東京でもしていたんです。インターネット関係の仕事なので、とりあえずインターネットが接続できる環境にあればできるので。だから、私はわりと身軽にこれたんですよ。とりあえず、自分の分はそれで何とかできるので。

——あの、これからのことって、どのように考えておられますか

すごく思うのが、最近、特定秘密保護法が決まったじゃないですか。で、それと同時に、私も知らなかったんですけど、ガン登録法っていうのも通っているんです。知らないですよ？ガンになった場合に必ず病院で登録をするというもので、その登録された情報は、病院の人は外に漏らしちゃいけないってなっているんですよ。で、これから福島で結構増えてくると思うんです、甲状腺ガンにしても小児ガンにしても。今、実際、甲状腺の異常が見つかった子って何十人も出ているんですよ。それで、今度ガンになったら、登録法で全部一元的に国が管理したいと。しかも、それをリークっていうか、今どれだけ福島とか東日本でガン患者が増えてます、小児ガンの子どもが増えてます、っていうことを医者が口外した場合には懲役2年なんですよ。そんなとんでもない法律が制定されたんです。

それらが意味するところはおそらく、これから予測されることを隠そうとしていると思うんですよ。特定秘密保護法が今回通ってしまったんで、今後、例えば、玄海原発が爆発とか起こしても、それがもし特定機密に指定されていたら、地方自治体はその枠外になってしまうので、佐賀知事とか玄海町長が事実を知らされることはないんですよ。知っているのは役人たちだけということで、地元も知ることができないんです。なんかそうなる、これから福島が何か事故を起こした時に、秘密保護法で情報が隠されてし

まうと、どれだけの放射能が放出されたのかもわからないから、ちょっと恐ろしいなと思って。

だから東京にも、帰れないなと思うんですよ、子どもが大きくなるまでは。福島原発も燃料棒を出すのに来年末までかかるわけでしょ。それもいつ、アクシデントが起きるかわからないし、秘密保護法で指定されたら、事故が起きてても隠されてしまうので、どれだけ危険かがわからないから。だから、こっちで様子見てたほうがいいかなあと。ちょっと怖いです。

——なんか、極端かもしれないんですけど、海外に逃げるっていう手を考えたりはしますか

でも、お金がないんですよねー。

——もし、お金があるんだったら

ああ、それならいいですね。やっぱり、海外に行こうと思ったら、すごくお金かかるじゃないですか、渡航費だけでも。うち5人だから。で、向こうで家探してってなると、すごくかかると思いますよ。で、そんな甘くないですよ、海外で生活することって。私、ブラジルに5年いたので。やっぱり教育が、例えば、ブラジルのサンパウロの公立学校に日本人が行けるかっていったら難しいんですよ。例えば先生のストで1週間学校閉鎖なんて当たり前だし、人数が多いから、小学校は午前中と午後で授業を分けてやっている。でも私立に入れるとなったら、とてもじゃないけどお金が…。で、聞いた話では、マレーシアの日本人学校とかインターナショナルスクールとかに東電の役員の子どもがかなり行ってるらしくて。向こうで日本人学校に入れるとしたら、例えば入学金だけで一人20万くらいかかるんですよ。駐在員の子であれば会社が出してくれるだろうけど。だから、なかなか海外移住ってことは言えない。アメリカのほうにも、かなり福島のが（放射能物質が）行っているって噂もあるし。

——お話が変わると思うんですが、今、生活上で困っていることとかありますか

そうですねえ。安倍首相が今度、原発の再稼働を成長戦略に位置づけるって発表したんですよ。それが許せないんですよ。あれだけの事故を起こしておいて、もうドイツは原発廃止を決めたのに、どうして当事者である日本が再稼働を、しかも原発をエネルギー政策の基盤として位置づけるということをするのかって。この2年、原発が動いてなくても電力は足りている。福島原発だってまだ収束しておらず、多くの人々が被爆しながら働いてくれているおかげでなんとか食いとめられている状態なのに。もう、信じられなくて。またそれを何でみんなが支持するのかわからないんですよ。

まあ、自分の生活もちろん大変で、金銭的にも余裕がなくて大変なんですけど、本当に子どもたちの将来を考えた時に、こんな国でいいのかなって、私よく思います。特に男の子が、一番下が男の子なんですけど、もしも徴兵制とかになったら、やっぱり怖いんで、何とかしたいんですよね。

この間の参院選でも若者の投票率が約 35%で、70 歳以上の投票率が 75%なんですよ。結局、参院選での全有権者に占める自民党の得票率は 20%にすぎなかったのに、過半数を取っている。小選挙区制の問題もあるんですけど。何とか若い人たちを投票に行かせたいんですよ。

ブラジルでは、投票に行かないと罰金があるんで、ほとんど全国民が投票に行くんですよ。だから日本でも、もっと若い人に政治に関心を持ってもらえる世の中をつかっていきたいと思って。自分の生活も大変なんですけど、将来的にここに住んでいけるのかわかっていう不安がすごくある。TPP が入ってきたら、国民皆保険の医療制度も崩壊して、医療費が格段に上がるかもしれない、いろんな問題が出てくる。そうなった時に、海外に逃げられるように資金を貯めておこうかなっていうのはありますけどね。

でも、その前に何とか阻止しなくちゃいけないなあと。やっぱり、日本っていい国だと思うんですよ。ストーカーとかいろいろ問題はあるけど、でもやっぱり治安はいいし、食も豊富だし、自然も豊かだし。サンパウロ市内なんて、コンクリートジャングルで、緑がないんですよ。やっぱりそういうところよりは、こっちのほうが豊かな子供時代を送れるかなとは思いますが、すごくその辺が不安ですね。

為政者にとってはね、福島で子どもが何人病気になるのが、何人死のうが、それは数の上のことでしかないから。そこに一人ひとりの人生があり、どういう家族があるのかっていうことに、私たちは思いをはせるわけじゃないじゃないですか。それをただの数字でひとくくりにして、「はい、何人死んだ」みたいに処理されてしまう。そこが心配ですね。

——あの、親戚の方はどうされてるんですか

みんな東京です。でも一応、私が、放射能が怖いから自主避難する、とりあえず放射能に気をつけて過ごしてくださいね、みたいなことは言っていますよ。

——こっちに来るときに反対とかは

ないですね。一応、状況を説明して「特に小さい子が危ないから、東京がどこまで安全かわからないから、とりあえず向こうで生活するね」ってことで。で、実家の母は年に 3 回くらいこっちに来て、手伝ってくれたりしているんですけど。でも、東京に去年帰った時には、もう誰も放射能は気にしてないです。マスクしている人もいないし。うちの夫には「絶対マスクして」と言っているんですけど。外食産業も流行っているし。やっぱり経済優先なんです。東京が汚染されているなんて言ったら、東京にオリンピックを招致できないですし。東京が安全っていうことをアピールしないといけないから、放射能なんて東京にはないですよってスタンス。

でも実際、私が住んでいた葛飾区内に水元公園という都立公園があるんですけど、ここからは 25 万ベクレル/kg 出たんですよ。すごい量ですよ、25 万ベクレルっていったら、チェルノブイリの強制（退去）区域に入るかなあ、強制の下ぐらいには入るんですよ。そういうのが実際に東京の公園から出ているにもかかわらず…。そこで子どもたちは何も知らずに遊んでいるというのが現実なんです。

「何人ガンで死のうがそれは放射能と直接関係ありません、あなたの食生活とか、そういうことによりますよ」って感じにするんじゃないですか。だから特定秘密保護法ができて、これから福島の子どもたちの健康被害の状況が公に出て来なくなったら、結局何もわからないですよ。本当、怖いと思います。情報統制がどんどんされていって。

とにかく国は福島だけで終わらせたい。実際には福島以外にもたくさん放射能が飛散しているホットスポットがあるけど、福島県のそれも極々わずかな帰還困難区域、浪江町とかそういうところにだけ限定している。福島市や郡山市は避難指示区域外じゃないですか。でも未だに  $0.6 \mu\text{SV}$  だかなんか出ている。

チェルノブイリでは事故後 5 年を過ぎてからしか甲状腺がんの症状が出ていないから、今福島の子どもたちに甲状腺疾患が出て、それは放射能とは因果関係ありませんって言われて。でもチェルノブイリで 5 年後だったのは、事故直後には検査をしていなかったから。日本ではチェルノブイリの経験があって、検査して、それだけ出ているのにもかかわらず、結局、チェルノブイリみたいに 5 年後に出るのは関係があるかもしれないけど、今出てるのは関係ありませんっていうスタンスなんですよ。恐ろしいですよ。

だから正直、東京とか北関東とかの中でもそういう病気が出てくる可能性はすごく高いと思うんですよ。だから、何とかこの状況を変えたいなって思うんですよ。でも、あまりにも知らない人が多すぎて、どうしたらいいか…。

——でも、あの、今のお話聞いてて正直なところ、あまり実感がわかりません。

だからやっぱり知らないって怖いことですよ。私も結局、テレビをつければ枝野（官房長官）が「ただちに問題はありませんが、安全です」って言っていたじゃないですか。だからとりあえず大丈夫なのかなって思ってたんですね。でも実は、いっぱい飛散して。なんか結局、義母は甲状腺ガンになるし、うちの子も鼻血を出したり、近所の子は、幼稚園のお友達は、肺炎すごかったんですよ。肺炎で入院とかが、2011 年の 8 月はすごく多くて。で、「こんなにみんな肺炎で入院するのはおかしい」って、「セシウムが肺に入ってるからじゃないのかな」みたいな感じで私は思ったんですけど。結局、そういうことって、自分で探していかないとわからないじゃないですか。東京にもこんなに放射性物質が飛んでたんだっていうのは、やっぱりネットじゃないとわからなくて。そういう情報を知らなければ、次の行動に移せない。放射能をシャットダウンするために産地を選ばなきゃとか、そういったことは結局知らないといけない。知らなければ、やっぱり今でも食べ続けていると思うんですよ。

生協でも東日本のものを販売するし、スーパーの店頭では福島のもので並んでるし。ひどかったのが近くのスーパーで、福島産の梨を山梨県産の箱に入れ替えていたんですよ。私、すごく腹が立って。でも結局そうしないと売れないんですよ。売れないと困るから入れ替えて。「ああ、なんかひどすぎる、この国は」って。結局、経済優先になってしまう。

よく、「自分にはこんなことは起こらない」って思ってるんですよ、みんな。別に気にせずに外食とかしていても、自分は大丈夫だって、自分の身にはガンなんて起こらないって思ってるけど、放射能は人を選ばないんですよ。結局、体内に取り込んでしまったら、1 ベクレルなら 1 秒間に 1 回、100 ベクレルなら 100 回、放射線を細胞に発射して、

100日経ってようやく体外に排出されるんですよ。それでも、継続的に摂っていれば、やっぱり、また次のがどんどん入ってきて発射してって感じじゃないですか。なんかね、それをイメージすると怖くて。なんかピカピカ光って、ずっと細胞を攻撃しているらしいんですよ、体内で。恐ろしくないですか？でも、そういうことをイメージできないから、普通は。だから結局、大丈夫だよって、ずーっと食べて、あとから、干しシイタケから1000ベクレルとか出ている、とかなってくる。でも、その時は、もう体の中に入っているかもしれない。

こっちに来てからも、どうしてもお菓子とか子どもたちが食べたがるし、私自身も好きだから食べてしまうこともあるんですけど、でも、本当に食品選びは困りますね。お煎餅にしてもブレンド米だったりすると、なに入っているかわかんないんです。全部を測っているわけではないですからね。で、それが全国に流通してしまうので本当に気をつけないと。特に子どもは放射能の影響を受けやすいから。でも、若い人もそうですよ。

放射性物質っていうのは遺伝子を傷つけるから、何世代にもわたって傷ついた遺伝子が受け継がれていく。チェルノブイリでも、その人は何ともなかったのに、生まれた子どもから心臓疾患が見つかったり、子どもが脳梗塞になったり。それが怖いなあって思っただけ。本当に気をつけなきゃいけないんですよ。ここにいるから安全とかじゃなくて。だから、聞けるものは、ちゃんと聞いたほうがいい。例えば学食とか、お米はどこものを使っていますかって。放射能のことを気にしている人がいるんだっていうことが、まわりの人の意識改革につながると思うから。そういうところから始めていって変えていかないと。

でも、知るという作業がね、結構時間をとられるんで大変なんですよ。でも、そうしないとやっぱり、いずれ自分の身に懸ってくる、それを知って行動を起こしていかないと、結局自分や家族の命を縮めることになるっていうか。だからこれから、情報が入りにくくなるのが本当に怖いなって思います。

——もう、本当にこっちに来てから安全ってわけではないんですね

もう、全然。だからね、子どもにも本当は全部食べなさいって言いたいんですけど、その食育のあり方としてね。けれど、どうしてもそれができない。うん。おかしいなあとは思いますが。

——その、例えば、東京にいるお友達とかはどうされてるとかって

西日本の野菜を通販で買ったり、岡山の農家から野菜を直接送ってもらっている友達もいますね。夏休みとかに遊びにおいでーって言うてるんですけど、やっぱり遠くて来られないっていう感じで。でも、気にしていない人は気にしてないです。全く、もう終わったと思っている人もいます。やっぱりそれは、その情報量の違いによって行動に差がでてくる。

でも、こっちに来て良かったのは、自主避難してきている人たちが何人かいるんですけど、そういう人たちがやっぱり、原発や放射能、遺伝子組み換え、添加物、そういったことに関してすごく情報を持っていて。私はそんなに詳しいほうじゃないんですよ。

原発事故が起きて、それまで原発問題に関心を持っていた人は3.11の事故後すぐに避難していますから。私はこっちに来て、そういう人たちにたくさん教えられましたね。みなさん、すごく勉強されている方たちなので。で、それをできたら、地元の、こちらで知り合った学校のお友達のお母さんとかにも伝えていきたいなと思うんですよね。少しずつでもいいから、情報を流して行ってね。子どもにやさしい世の中へと変えていけたらいいなあと思っています。



### 第Ⅲ部 学生たちの感想・企画



# インタビューを終えての感想

海稲朋実

私は、ふわりネットワークの自主避難者インタビューにおいて、お二人の自主避難者の方のお話を聞かせて頂いた。お話を聞く中で、お二人とも「放射能汚染に関して、日本にはもう安全な場所はない」と考えていらっしゃることに衝撃を受けた。私自身の原発に対する知識や関心は浅く、さらに自分が自覚しないうちに、原発に対する意識が風化しつつあるのだということを強く実感した。

お二人は、特に食べ物の汚染に注意を払っていらっしゃる、「関東産のものは絶対に子どもに食べさせられないし、魚はどこ産でも食べさせるのをためらう」とおっしゃっていた。お二人ともご自身の健康というよりも、我が子に対して「命の危険にさらさせてしまった」という後悔と、「安全を守りたい、将来を保証しなければ」という強い使命感と覚悟を感じていらっしゃる、そのために親である自分にできることとして食の安全に特に気を配っていらっしゃることを知った。しかし、私は食べ物の汚染に対して、放射能の恐ろしさに共感する反面、「そこまで考慮してはきりがないのではないか」とも思ってしまい、インタビュー中には返す言葉を迷ってしまった。私は、被曝の恐ろしさを身近に感じる場所に住んでいたわけではなく、守るべき子どももいない。そのため、震災当時関東に住んでいらっしゃったお母さん方の不安や覚悟は、想像しようとしても想像し足りないのだと思った。そのことから、聞き手の考える話し手のニーズはあくまで想像にすぎないのだと実感し、話し手にとって最も良い支援を実現するには、話し手の話に傾聴する中で直接ニーズを把握するということが大切なのだと学んだ。

また、インタビューをさせて頂いた一人の方は、中学生と小学生のお子さんが二人いらっしゃるが、震災直後に離婚なさったため、北海道、岡山、福岡と一人で新しい生活の場を探し、一年前に福岡市にやってきたご家族であった。その方はインタビューの中で、ご自身の両親のお話をあまりされなかったため、ご両親とはつながりが薄いのではないかと感じた。そのため、知り合いのほとんどいない土地で「困ったことは誰に相談しているか」と尋ねたところ、「避難場所として福岡を紹介してくれた、飯塚に住む自主避難者の仲間には相談しているが、あとはインターネットのQ&Aを参考にしている」とおっしゃっていた。そのことから、現在ご本人はさほど必要性を感じていないにしても、身近に気軽に相談できる方や親身になって話を聞いてくれる方が少ないということは、ご本人が不安を抱えこんでしまうことにつながるのではないかと感じた。本人に感知されたニーズと他者が捉える潜在的なニーズには一致するわけではないことを実感した。よって、直接お話を聞くことで話し手の主張するニーズを捉えるだけでなく、隠されたニーズやご本人ですら自覚していないニーズを捉えることも必要であると学んだ。

自主避難者インタビューは、直接お話を聞くことで、話し手の表明するニーズや潜在的なニーズを把握するということの大切さと難しさを実感した。さらに、どこまで話し手の想いに寄り添えているのかということ、聞き手である私が自分自身で把握することがとても難しかった。しかし、「最善の利益はご本人の中にある」という意識を忘れず

に話し手自身の言葉を引き出し、話し手の人生を傾聴するという姿勢が大切であると学んだ。

吉田圭那

私は、東京都から福津市に引っ越してきた O さんにインタビューをしました。インタビューを行った場所は、他の避難者の友人が暮らしているシェアハウスでした。私たちはまずシェアハウスというもののことを知らず、そのシェアハウスには友人一家と上の階には学生がいて一緒に住んでいるということを知っていただきました。いきなり知らないことを尋ねることとなってしまう、インタビューする側として知識不足に感じ、なんだか申し訳なかったことを覚えています。そして、「避難者」という言葉から勝手に福島や宮城などから引っ越してきている人ばかりだと思っていましたが、O さんのように被災地以外から避難してきている人もいるのだと知りました。

震災があった 2011 年 3 月は、私たちが高校を卒業した月でした。O さんは必死の情報収集の後、子どものために少しでも遠くへ行かなければと思い、2012 年 4 月に福岡へ引っ越してきました。そんななか、私たちの代で浪人して東京の大学に行った友達もいるし、それ以降の年に東京の大学を受験した後輩もたくさんいるだろうと思います。この意識の差はなんだろうと思いました。もし日本に住む全員が O さんと同じような意識を持って、同じように判断するならば、福岡からわざわざ東北に近付くような進路選択をするでしょうか、親も止めるのではないのでしょうか。

また他のインタビュー結果を聞いて、福島や宮城の魚や野菜などの食べ物についても気付いたことがありました。それは、東北で実際に被災した人や避難してきている人こそが、とりわけ「福島の食べ物」に敏感であるということです。よくニュースなどで風評被害に悩まされている東北の農家や漁師が取り上げられていますが、「もう安全だから」と主張する生産者と「自分では絶対に買わないし、給食にも使わないでほしい」と弁当を持たせる消費者との意見は未だに一致していません。

これらに共通するキーワードは「周囲の関心の低さ」だと思います。福島県民でなくとも全員ができるだけ遠くに引っ越すべきだとか、被災地の食べ物は安全だから避けることなく積極的に購買すべきだとか、何が正しいという話ではありません。ただ、その判断のために関心を持って情報を得ようとする姿勢や熱意や、得た情報が正しいかどうかを判断するための知識の差が被災地から離れるほど大きくなり、関心が薄れがちになっているのではないかと改めて感じました。今原発がどのような状態になっているのか、福島の食べ物は本当に危険性があるのか、復興財源はいくら計上されているのか、復興は現実的に進んでいるのか、自信を持って説明できる人が私たちのなかにどれだけいるのでしょうか。国が情報を流さないようになったとも言われますが、国民一人ひとりに「知りたい」という思いがあれば国ももっと熱心に情報量を増やし、その判断材料をもとにまた一人ひとりが自分の意見を持ち、考えて行動できるようになると思います。「関心を持つ」ことはそう難しいことではない。インタビューさせていただいた皆さんのためにも、被災者や避難者だけが必死に訴えるような現状を変えるいちばん身近な支援の一步になると思います。

## 五反翔子

私は、最初にインタビューをした方から関東から引っ越して来られたということを知ったとき、正直驚いた。原発のある福島から少し離れた関東からなぜ引っ越しをする必要があるのか、という考えが自分の中にあったからである。しかし、実際にインタビューをさせてもらい、その考えは、知識のない自分の価値観だけで見てしまっていたからだという事に気付いた。私は東日本大震災後、学習支援ボランティアとして被災地に行かせてもらったのだが、地震や津波によって目に見える被害に対しては関心を持っていたものの、目に見えない原発による被害についてはどこか自分とは関係のないこととして考えてしまっていた。

今回インタビューさせていただいた方は、子どもや家族のために考え、自分で調べて決断し自主避難をして来られた方だった。食に関して非常に興味を持っておられ、被災地産のものはもちろんのこと原発によって汚染された可能性がある地域のものは避け、できるだけ福岡のものを食べることにしていた。いくら調べてもわからないことがあるときには自ら出向き、自分の目で安全や安心を確かめるようにしていたその方の行動は私からするととてもすごいことのように感じたが、将来ある子どもたちのことを考えるとそのような行動に至るには納得がいく。何かを決断するとき、判断材料が必要になってくる。今回の原発に関しては、自ら調べなければ得られない情報も多くご苦労なさったとのことだが、このインタビューの方は事前にある程度の知識を持っておられたため素早い対応につながった。常日頃から様々な物事に対してアンテナを張っておくことも大事であると感じた。

「母は強し」、私がその方のインタビューに同席したとき特に思ったことである。自主避難のことを周囲から非難されても、自分のやっていることは正しいと思ったり、調べたことは自分だけじゃなく同じような境遇の人たちにも発信したりしていたのは、すべて子どもたちのことを考えてのことだったように感じる。何か守るべきものがあるときには人は強くなるのだと感じるインタビューだった。

## 坂井彩

インタビューをしてみて自主避難者の生き辛さを感じました。私がインタビューをしたお母さん達は「子どものため」と自主避難を後悔していませんでしたが、そこに至るまでの過程や避難後の生活の様子などは、想像の至らない厳しいものでした。幼稚園のママ友や先生からモンスターペアレンツの扱いを受けたり、近所の人や友達に内緒で避難してきていたり、避難先の自治体が自主避難者に素っ気ない対応をしたりと、理解が得られずに苦しんでいる姿を多く見受けました。

インタビューでは毎回、「地元に戻りたいですか」や「向こうへ戻ることは考えていますか」と質問しました。ほとんどの方が「帰るたくない」と答えると思っていたのですが、実際はインタビューした方全員が「帰れるなら帰りたい」とおっしゃいました。私は、「自主避難をしてきたのだから、地元や前住んでいた場所に愛着や帰属意識は持って

いないのだ」と考えていました。しかし、その考えには、「離れたいから離れてきたんだ」という思い込みがあって、地元を離れる葛藤をお母さん達の立場から考えられていなかったと反省しました。お母さん達が浮き目を感じたり、こちらの生活に馴染めないと思っていたりするのも、私の様に先入観を持って自主避難者のことをみっていたり、理解しようとする姿勢がないからなのかなと思いました。

インタビューを通じて、人はどこかで「自分は大丈夫」と思いながら生活しているのだと気づきました。その根拠のない安心が、無関心や無知へ繋がっていき、安全に生きるための選択や視野を狭めているのです。お母さん達は、口をそろえて、「知ろうとしなくちゃダメだよ」とおっしゃいました。「自分で知ろうとしないと情報は手に入らないし、勝手に入ってくる情報は都合のいいものでしかないから、常に疑問を持たなくてはいけないよ」と教えてくださいました。私は、インタビューをするまで自分の生活に何の疑問も持っていませんでしたが、これを機に自分の生活や向かおうとしている方向が安全なのか考えたいです。

### 三宅恵梨子

わたしは今回この被災地から避難されてきた方々のインタビューをして、避難されてきた方々の経験を聞きました。その方々の経験は私が想像しているよりも、壮絶なものでした。私がインタビューさせていただいたIさんは、避難することについて旦那さんにも、旦那さんの両親にも理解してもらえず、でも、どうしても避難したいと思ったIさんは、夜中に寝ている子供たちと愛犬を車に乗せて、とりあえず西に車を走らせたようでした。このIさんのお話を聞かせていただき、周りから理解してもらえないことの辛さ、また、周りから理解してもらえなくても、子どもたちのために避難をしたIさんの決意と母親としての責任を強く感じました。

また、私がインタビューをさせていただいたもう一人の方、Sさんのインタビューの中で、Sさんは日本のテレビは重要なこと、国民が知るべきこと、知って考えることができる情報を提供していない、とおっしゃっていました。

また、IさんにもSさんにも共通することですが、やはり避難してきたということは周りの人から白い目で見られたり、きちがいだと思われたりするそうです。そのほかにも、被災地で生活することの危険、放射能の危険などを被災地の友人などに話すと、どうしてそんな風に言うのか、聞きたくない、と怒られてしまったことがあるそうです。やはり今まで自分が安心して生活してきた場所が、危険だとか、避難したほうが良いということに関して、信じられない気持ち、信じたくない気持ちがあるのだと感じました。Iさんの旦那さん、旦那さんの両親も含め、避難に対していいイメージを持っていない方も、テレビなどがきちんと放射能に関して報道をしていれば、情報を得ることができ、放射能について考え、選択することができたのだらうとも感じました。

避難されてきた被災者の方からのお話を聞いたことは、私にとってとてもいい経験になったと思います。この経験が無駄にしないように、インタビューを受けてくださった方の思いが無駄にしないように、これから、被災された方が笑顔で幸せに生活できるように、私たちにできることを探し、実行していきたいと思います。

上野麻美

今回、授業の一環として震災の自主避難者への聞き取り調査をさせていただいたのは、とても貴重な経験であったと思います。他者の経験や歴史、お話を伺うことは、自分が知らない世界を知ることができる機会だと考えます。今回の聞き取り調査でも、本当に私の経験したことのない人生を歩んでいらっしやって、また、想像もつかないような考えをして生活していらっしやるのだということが分かりました。

私は、久留米や鳥栖のほうへ避難された方で、3人の方にお話を伺ってきました。どの方も共通して、健康被害や子どものことを第一に気にかけていらっしやることが分かりました。聞き取り調査に出かける前に授業中で見せてもらった自主避難者の方へ取ったアンケートの中に「家庭不和となった」という回答に印をつけている家庭が多いことがすごく気になりました。私の考えでは、震災が起こって生活が困難な状況にある中だからこそ、家族は支えあってより結束が強まるものではないだろうかというものです。こうした考えだったので、是非伺える機会があればお話ししていただこうというのを一つ目標としてこの調査に臨みました。幸いなことにお話を伺った3人の方々は家族間の仲は良く、離れていても定期的に会って支えあっている様子でした。私の疑問に対しては、「避難と言っても放射能は目に見えないし、健康被害が出るのも明確には放射能のせいだとは分かっていない。また、そうした健康被害は子どもや女性を中心にしやすいため、経済中心の男性には中々理解してもらえないことが多いから、意見の食い違いは出てくるだろう」ということでした。このことを聞いて納得したという気持ちもありましたが、避難者はとても複雑な思いを抱えて避難してきているということを実感しました。生活面や経済活動面においてもお話を伺うことができ、やはり物的支援は必要だと思ったのですが、前述したような背景を聞いて、精神面での支えやケアが重要なのではないかと思いました。

現在、聞き取り調査に行つて自分が実際に社会福祉協議会の職員だったとしたらという設定で支援を考えている最中です。お話を伺った中に、物的支援においても「もっと私たちの生活に寄り添った支援であつたら良いな」という意見がありました。人間が生活することを考えると必要となる物の順番は決まってくるから、そういう支援の順番に配慮した支援が出来ていない状況があるのかなと考えました。これは具体的には家電製品等の家具の話であつたため、それを追及して支援企画を作っていこうと考えています。また、今回の聞き取り調査は、主に私がインタビューをするという役をさせていただきました。相手は人間であり、決まった返事が返ってきたり予想していた話の流れにならなかつたりすることがほとんどだということが分かっていたため、上手く調査が進むかとても不安でした。お話を伺う上で一番難しいと思ったことは、年齢でした。家族の状況や経済状況、また少し踏み込んだ人間関係のことや将来の展望は、相手の方も多少の準備は出来ていたようなので、話の流れに注意しながら聞くことはできたと思います。年齢は、もしかしたら今後の話に影響が出るのではないか、話しづらくなるのではないかと思い、ためらったところでした。聞き取り調査の技術というものを習得したとは言えませんが、相手の話したいことを話してもらい、流れに気を付けて、支援につなげる

ために聞いておきたいことを聞くということに気を付けて取り組むことができたと思いますし、相手の話の中から、自分が予想していなかったことが出てきて、それが新しい視点となり、何か支援につながるものが含まれているのだということを改めて学ぶことができました。

## 城戸芳仁

私は今回、東日本大震災によって福岡へ自主避難された方々にインタビューさせていただくという大変貴重な機会に恵まれ、私自身の震災に関する考えに対して非常に大きな影響を受けました。東日本大震災、福島第一原発事故が発生して早くも3年が経とうとしている今日この頃。新聞やニュースでは今尚、原発再稼働や原発事故に関する情報問題、それらに対するデモなど様々な問題が取り上げられています。私自身これらに関するニュースは非常に興味深く、特に国の原発に対する姿勢には自分なりの考えを持っています。しかしながら、人間というものは実際に自分の身にそれが起こらない限り、なかなかその危険性を実感することができない生き物であり、私もそのうちの一人です。正直、被災者や避難者の方々のお気持ちを完全に理解することなど不可能に近いと考えています。しかし、例えそうであっても少しでも被災者や避難者の方々のお気持ちに寄り添うことが重要であり、特に社会福祉士を目指す私にとってそれはある意味1つの使命でもあると考えます。そのような中、今回のような機会に恵まれたことは私にとって非常に重要な意味を持っていることを実感しました。自主避難されたKさんにインタビューをさせていただき、Kさんの現在に至るまでの苦労話や現在の生活におけるお話、原発に関するお気持ちなどを伺うことができ、少しでもKさんのお気持ちを共有することができたという事実を得たことは私という人間をひと回り大きく成長させることができたと思います。Kさんの食に対する不安やお子さんの教育環境に関する不安など福岡へ避難されて尚、生活に不安を残すような状態にいることを伺い、私たち社会福祉を学ぶ者はこれを真摯に受け止めこの状況をいかに少しでも改善していくかを考えていく必要があることを学びました。社会福祉士にとってその人が豊かな人生を歩むためにはどのようにすれば良いのかを考えることは被災者や避難者に対しても変わりありません。社会福祉を学ぶ者として、また一人の人間として今回のような経験をさせていただきKさんの人生に少しでも関われたことに感謝いたします。本当にありがとうございました。

## 森田菜摘

このインタビューでは「量的調査」ではなく「質的調査」であることから、その人や家族の生活、生活歴から育まれてきた価値観や生き方を知るということを学びました。インタビューの最初は、質問項目に沿って、避難する前の生活の様子や家族のこと、必要な支援についてお話を聞きましたが、その方が私たちに語ってくださったことはほんの一部分であって、想像以上に苦労されたことやつらいことがたくさんあったということも表情や会話の中から感じることができました。質問項目も終わったあとのフリートークで、その方が最も話題にされていたことは、「食の安全」についてです。その方は、

「福岡に引っ越してきても、関東、東北の野菜や肉などの食材が普通に売られている。外食しようと思っても、どこの県の食材が使われているかわからないから外食できない。子どもたちが食べている給食も必ずしも安全とは言えないし…。考えるうちにどんどん食事が制限されていって、もう何を食べていいのかわからない。」と悩ましそうな表情で語って下さいました。私は、この方の話を聞いて、今までどこの食材が使われているのかなど何も感じずに食事をしてきたし、原発が「食」にまで被害を及ぼすのかということを知りませんでした。また、私を含め、震災の被害にあっていない福岡や他県の人々は、原発被害に対して知識・関心がほとんどないということも問題であるということに気づかされました。私は、このインタビューで、当事者の考えや思いを大切に会話しよう意識して行いましたが、意識しすぎて会話のやりとりがぎこちなくなってしまうときもあり、当事者の思いを引出して会話するという難しさを感じました。そして、アンケート調査では感じるができない当事者の表情や私たちに伝えたい思いも感じることができ、インタビューの必要性や「質的調査」の役割について理解することができたと思いました。

## 浅野真由

今回自主避難者の方への聞き取り調査を通して、まず私の考えの甘さを痛感しました。震災は発生直後から今日に至るまで、テレビで大きく取り上げられており、現地からの中継やそのときの様子などから大変なことが起きたということは分かりましたが、自分の住んでいる地域とは遠く離れた地域のことであるため、自分にはあまり関係ないことだと思いつ込んでいました。しかし、今回の聞き取り調査で、自主避難者の方たちのお話を直に聞くことができ、その考えを改めなければいけないと感じました。お話の中で、例え賛成ではなくても、何も言わないでただ黙って聞いているのは、賛成したことと同じであるとおっしゃられていました。今回のような私の他人事な態度が、まさしくそれであると考えます。今回の場合は原発でしたが、その対象はさまざまです。何事にも他人事ではなく、自分だったらどうなのか、自分に置き換えてしっかり考えていこうと思います。また、聞き取り調査をさせていただいた方々のお知り合いの中にも、現実を直視することなく、根拠のない自信から、自分は大丈夫だと思っている方が大半であると伺いました。私自身、そういった考え方をしてしまいがちなので、情報に踊らされることなく、自分で確認することを意識したいと思います。

私が聞き取り調査をさせていただいた方々は、みなさんお子さんがいる家庭の方ばかりでした。さらに、福岡に避難してきた理由にも、元いた場所では子育てができないと判断されたことが大きく影響していました。その様子を見て、子どもを持つ親の強さ、家族の絆を感じました。元の生活をすべて捨ててまで、福岡に避難してくることは、私には想像できないほど大変な苦勞であったと思います。そんな思いをしてまで避難することを決意されたのも、家族、とくに子どもの存在は大きいと思いました。

自主避難者の方の聞き取り調査で、自分の考え方を見直すことができました。この機会がなければ、私は一生、震災を他人事として生活していたと思います。この貴重な経験を活かして、今後は自分から情報を得ていこうと思います。

前田愛友子

今回社会福祉援助技術専門演習Ⅱを受講し、対人援助をするためにはいかに相手の気持ちや話を引き出すかが重要であることを学んだ。

社会援助技術専門演習Ⅰでは様々な事例を基に班で考察するというものであった。この授業では自分の意見を主張することは必要だが、主張しすぎることは問題の本質を見失うことになることを学んだ。また、支援者も一人だけでなく何人も集まって考えを出し合うことで支援者よがりにならない考えを生み出すことができることがわかり、とても勉強になった。

社会福祉援助技術専門演習Ⅱでは、原子力発電の事故で放射能の濃度が上がり生活できなくなった家族が母子避難をした体験をインタビューで聞かせていただくことができた。東北地方太平洋沖地震は2011年3月11日に太平洋三陸沖を震源に発生した地震であり、東北から関東にかけての東日本一帯に甚大な被害を生み出した。この地震では津波での土地の浸食や家屋の崩壊もあったが、地震の後に問題になったものが原子力発電所の事故である。特に地震動と津波の影響により発生した東京電力の福島第一原子力発電所の事故で発生した炉心融解などの一連の放射性物質放出を伴った原子力事故である。その影響は200キロも離れた関東や都心部でもはっきりと出ている。放射能の濃度が福島県と同等程度の放射能が検出されることが多く、特に子供に身体被害が出始めていた。家族で生活ができないという状況に追い詰められ、住み慣れた土地を離れ生活しなければならなくなった家族がたくさんいらっしゃることをこの授業を通して知った。また、授業を通して行ったインタビューでは、生活の基盤を築いた土地を離れ全く見ず知らずの土地に転居する難しさ、生活を再構築するための経済的精神的困難が実に多いことが分かった。なにより大切な家族を守るためにモンスターペアレンツだと呼ばれ周りから孤立せざるを得ない環境が生み出される現状を知り、インタビューの途中なのに悲しみや怒りが混じった複雑な感情が生まれてしまった。今回のインタビューはそんな被害者にもなった避難者に支援者としてどう考えどのような支援を行えばよいかをたくさん考えるよききっかけになった。実際に被害にあっていない私たちが避難者の気持ちをすべてわかることは難しいのかもしれないと考えたこともあった。しかし、知ることから始め、想像力を豊かにして一人一人を考えることが支援につながると信じて活動を続けていけば、いつかは一つずつ必要な支援をおこなえるのではないかと感じた。

社会福祉にこれから携わる者として、支援を必要としている方々の気持ちをどのように言葉や態度としてあらわしてもらい、その言葉や態度をきっかけにどのように支援していけばよいかをより深く考える機会となった。この授業で学んだことを自分の中で良く消化し、自分の力となるようにこれからも努力を続けていきたい。

村山明子

私は3.11の震災後に募金箱があるたびに募金をしていました。少しでもお金を寄付することで、被災者のためになればという思いを持っていたからです。しかし、その思い

はなんとなく被災者の為に使われたら良いという思いにすぎませんでした。自主避難者のインタビューを通して、被災者の方々の地元を復興することも大事であるが、同時に、被災者の話を聞いてそれを真摯に受け止め、被災者のために行動に移したいと思うことの方が大切ではないかと思いはじめたからです。被災者の中には、家族全員が助かったところがあれば、助かったが家族と離れてしまった家庭もあり、精神的に辛い思いをしている方が多いのではないかとインタビューの度に思われました。自主避難者の中には母子で福岡に避難された方が多く、夫と離れて暮らしていたり、震災を機に離婚したりしている場合など様々な家庭がありました。その方々の話を聞きに行く前までは、私たち学生が聞いたことに対して、本心を答えてくれるかという不安がありましたが、どの方も震災当時のことから今までのことをとても詳しく話して下さったことから、話を聞いてほしい方のほうが多いのではないかと思うようになりました。私たちが行った聞き取りは、ただ事実を聞いたというだけではなく、被災者の精神面でのちょっとした助けになっていたのではないかと思います。

また、話を聞いている中で、震災前と後では価値観が変わったという方の話が印象的でした。震災後に、自分の人生を見つめ直すようになった方がいらっしや、仕事も給料を優先するよりも、仕事内容を重視するようになったといいます。与えられた業務をこなすナースよりも、もっと人の役に立てるような職業をしたいと思うようになったというお母さんの言葉がとても印象的でした。震災はこれだけ人の考え方を変え、また震災など、いざという時にはその人の本当の性格が出るのだということも自分の中で明らかになりました。そう考えると、自主避難されたお母さん方はとても勇気があり、決断力のある方ばかりであるということが実感できます。また、聞き取り調査を通してお母さん方から放射能の恐ろしさや、食に対する考え方を聞く中で、私自身も放射能や職に対する考え方が変わりました。当事者の話を聞くことがどれだけ人の心に影響を与えるかが分かった聞き取り調査となり、お母さん方の話しによって少なくとも私の震災に対する考え方は大きく変わりました。

## 太田有香

今回、自主避難者への聞き取り調査をしてみて、自主避難者の思いを強く受け止めることができた。私は自主避難者と聞いて、「“避難をする”という行動力がある人だから、自分の考えや行動に揺らぎのない方々だろう」と考えていた。だから「相手がどんどん話してくれるだろう、それを傾聴しよう」と気楽な気持ちで臨んだ。インタビューの当日、初めて顔を合わせてみると“明るく気さくなお母さん”であった。そして、話をしていくうちに、自主避難という行動に揺らぎを抱えつつ、それでも「子供たちの健康のためなら」と気丈にふるまっている様子を感じた。この時、それまで私が持っていた自主避難者へのイメージは、無意識のうちにメディアに刷り込まれたものだ気づいた。そして、震災や原発事故が起きるまでは穏やかに生活していた方々が、自分よりも家族の健康のためを思い、生活を一変させなければならないという現実があることを目の当たりにした。

つらかったことは何かという問いかけに、「自主避難なので全部自己責任だということ」

とおっしゃったのが印象的である。確かに私も「東北ではなく関東から避難してくるのはどうしてだろう」と思っていた。福岡に避難してきた後も近隣住民やママ友から「なんで東京から来たの?」「東京って危ないの?」と聞かれてばかりだったらしく、それは自分の意思を否定されているような感覚になっただろうと推測する。子育てサークルや避難ママの団体のなかでは、自分らしくふるまい、原発事故についての意見をありのまま伝えることができるのに、そうではない枠組みのなかでは「こだわっている人、変な人」と受け取られてしまうことが、新しい生活を余計に困難にしていると思った。社協の職員をはじめとする支援者は、社会資源と結びつけるだけでなく、そういった意識を変えていけるような取り組みが必要だと感じた。

また、「原発事故をきっかけに、自分が何も気づいてなかったことや電気の恩恵を受けていたくなく暮らしをしていたことを反省した」という言葉が、決して綺麗ごとではないと伝わってきた。私は「九州で生活しているから」と、どこか他人事のように原発事故をとらえていたように思う。今回のインタビューが、私の意識を変えるきっかけになった。さらに少しずつ見聞を広げ、現代の社会で起きている問題にもきちんと意見が持てるように努力していきたい。

## 大崎敦広

私は、社会福祉技術専門演習Ⅱの授業で東京から自主避難されてこられた方々にインタビューさせていただきました。インタビューをする前は原発の事故が起きた福島県でもないのになぜわざわざ東京から避難する必要があるのだろうか疑問に感じていました。しかし、実際にインタビューをしてみると、テレビや新聞など日常に出回っているメディアの情報とインターネットや書籍など、自分で自ら調べる原子力発電所の被害の影響は大きく異なることが、自主避難をされた大きな理由であることが分かりました。原子力発電所の放射能被害の影響は世間一般に出回っているものではそんなに深く悩むほど事態は深刻ではないといった報道がなされていますが、実際は基準の2倍以上の放射性ヨウ素が検出される地域が東京にあるなど、放射能の被害は広範に及んでいるのが現状であるとのお話を伺いました。今まで鼻血をほとんど出していない子が、体操服を血だらけにして帰ってきたというお話もありました。

私は、自主避難してこられた方々のお話を伺ったとき、玄海の原子力発電所が爆発する可能性が少しでもあると考えたとき他人事ではないなと感じました。確かに、鼻血を出したことや病気になったことが、放射能の影響が直接の原因ではないかもしれませんが。また私自身、携帯の充電がなくなるとすぐに充電しようとするなど原子力に頼っている部分もあり、このような人間が安易に原子力発電所を撤廃した方が良いと言うのはどこか違うのではないかと思います。しかし、なにげない日常を送っていた人が原子力発電所の爆発の影響で家族の分断や経済的負担など、本来抱えるはずのない問題を抱えてしまい、なにげない日常を奪われてしまったのは事実です。福岡に避難されてきた方々に東京で過ごされた日常と取り戻してもらうことは実現困難なことかもしれませんが、その地域で安心して生活できる、快適に生活できるような環境を少しずつでも作っていく努力をしなければいけないと思いました。

## 大津 慧

今回、自主避難者の方から話を聞いて、考えさせられたことがいくつかあります。

一つ目は、食べ物の安全性についてです。福島の近くで育った農作物は放射能を浴びている可能性があり、それを食べることによる人体への影響を自主避難者の方は懸念していました。そして特に子どもは、大人に比べて影響を受けやすいので注意しなければいけないと話してくれました。食品の安全性について考えている人が身近にいなかったため、この話を聞いて驚きました。自分が今まで食品の安全性について無頓着だったなとも思いました。お店に置いてある食べ物はどれも安全であると信頼しきっていました。自分が食べる物は、直接自分の体の健康に影響与えることになるので、もっと産地や品質などに着目して慎重に選ぶ必要があるのかもしれないと感じました。

二つ目は、国の原発に対する対応についてです。国が放射能の危険性などを国民に対して十分に説明していないので、原発の問題に対する認知度や関心が低いとのことでした。確かに、震災後にも福島に近い東京に上京をする人はたくさんいます。私自身も原発や放射能に関する興味や知識が全くなくて、自主避難者の方から話を聞いて原発の問題に対する意識の違いを感じました。もし、放射能の危険性や原発の問題に関する情報を国が国民に対して意図的に伝えていないのだとしたら、問題があると思います。現在も放射能の危険性を把握せずに避難をしない人や原発の近くに住んでいる人たちの健康が危ないからです。本当に危険であると国が分かっているのなら、それを国民に伝えて適切な処置を取ることが必要だと思いました。また、メディアの情報を鵜呑みにするのも良くないと感じました。正しい情報とそうでない情報を判別する力も国民には必要です。

この二つのこと以外にも自主避難者の方から話を聞いて得たことはありましたが、やはり正しい情報を入手し、自分自身で自分の身を守ることが重要であると強く思いました。

## 楠田志緒里

私はこの授業で3人の自主避難者の方にインタビューをさせていただきました。どの方にも共通していったことは、被災されたとは思えないくらいに元気そうに見えたことです。私の勝手な先入観で、「きっと落ち込んでいるのだろうな、生活が苦しくて大変なのだろうな」と考えていましたが、そのような素振りとは全く見せず、笑顔を見せながら自分たちの生活について私たちに細かく説明してくださいました。生活が今までとは一変して、大変そうではありましたが、被災地に残るよりは福岡に来てよかったということをお二人ともおっしゃっていて、母親にとっての「生活、いのちを守る」ということはお金には代えられないのだということを感じました。

また、このインタビューで私は卒業論文に書きたいテーマを見つけることができました。インタビューをしていく中で、伝えるべき情報が世間に伝えられていないということを感じました。インタビューを行ったうちの1人の方が「福岡ではいい意味で震災が

風化している」という言葉を発した時に、これは大きな問題だと私は思いました。被災された方にしかわからないこと、伝えたいことはたくさんあるということをインタビューで知り、そのことをもっと多くの人々に知ってほしいと思いました。私自身インタビューでかなりの衝撃を受けました。それと同時に、これはインタビューをした私たちだけでなく、国民が知っておくべきことで、それを伝えていくのが報道の役割だと考えました。

最初は正直、どうしてインタビューを行わなくてはいけないのか、なぜ福祉の授業にインタビューが必要なのかと疑問に思っていました。しかし、支援を行っていくために質的調査が重要だということを授業を通して知り、インタビューを行う理由がわかりました。相談援助の技術を身につけたり、制度やサービスについて学習することも社会福祉士になるためには必要なことです。しかしそれだけでなく、調査を通して目の前のクライアントの生活を知り、ニーズを把握したりすることも社会福祉士にとって大切な技術だということをこの聞き取りを通して学びました。

## 墨谷 幸大

私は今回、震災の影響を受けて自主避難をしてきた方々の話を聞かせていただくことができ、様々な考え方や、国の現状を少し知ることができ、視野が広がったのではないかと思います。

インタビューでは、被災当時の現状のことから、福岡へ避難した後の状況、心情、私たちがこれからしていくべきことまで、お話を聞かせていただくことができました。インタビューの際は、どのように被災者の心情や被災地の現状を受け止め、どのような表情をしてなんと言えよいいのか、複雑になって分からなくなることが多くありました。例えば、「何か支援が必要なこと」について聞くにしても、自主避難者が現時点でそもそも支援を必要としていると思っている時点で、偏見が入っているのです。さらに、実現の可能性も少ない支援策を簡単に口に出して言っているのかという思いもありました。実際に自主避難者に課題について伺ってみると、私たちのグループでは、国が正確な情報を発信していないというものが見いだされました。私たちが普段目にしている、テレビ、新聞などでも、震災後の放射能汚染等の危険性について詳しく説明しているものは、少ないとのことでした。

そこで、インタビューを通して最も学ぶことができたことは、正確な情報の入手についてです。今まで私は、国が発信する情報について、すべて鵜呑みにしていましたが、自主避難された方々の話を聞いて、正確でない情報が発信されていたり、情報を発信していなかったりするといったことがあることを知ることができ、それについて考えを深めることができました。そこで、今求められていることは、まず、真実の情報を自分でしっかり把握し、行動をしていくということだと気づきました。つまり、人に流されずに、自分で情報を掴み、様々な危険性を知ることによって、正しい判断をし、自分を守っていかなければならないということです。

## つながる地域

メンバー

海稲 桂田 五反 森田 前田



## 聞き取りから見えてきた課題

### 放射能の問題

- 特に食べ物(生産地など)に関する問題
- ・ 外食に行かなくなった。
  - ・ 食料を自分自身で調達しなければならない。
  - ・ 安心な食生活を求めるために避難。
  - ・ 安心な食べ物を提供している店を各自で情報収集するため、負担が大きい。

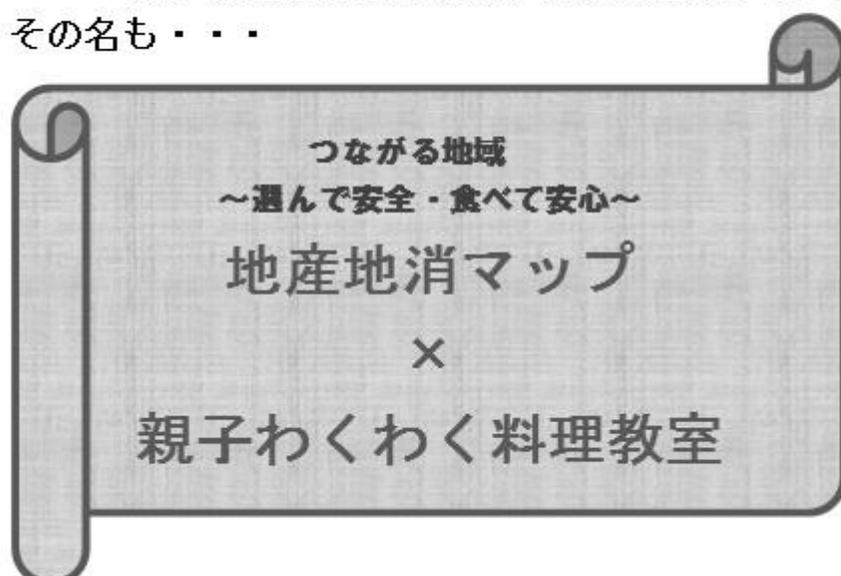
## 解決策として・・・

- 九州産や福岡産の野菜を日々の買い物で手に入れやすいように、家の近くで販売している店を見つける。
- 福岡や九州で採れた野菜や果物を販売する店やレストランの情報を得る。
- 安心な食材をどのように手に入れたか、周囲の人から情報を得る。

それらの情報をまとめたマップ作りをする!!

そして地元の野菜でおいしい料理を作る!!

その名も・・・



マップ作り×料理教室のテーマにたどり着くまで・・・

インタビューの内容から、特に「食」に対する意見が多かった

なぜか？

放射能を浴びた農作物や肉・魚を体内に摂取すると「内部被ばく」を起こす可能性がある

「内部被ばく」  
って、何？

内部被ばくとは、何らかの理由で放射線源が体内に取り込まれたときに起こるもの

どうやって  
体内に取り込まれる  
の？

放射性物質の体内への取り込みは経口曝露と経気道曝露、経皮曝露があり、経口曝露は食事から起こる可能性が高い

どんな人に  
特に影響があるの？

内部被ばくは特に若年層に影響が出やすい

じゃあ、  
どうしたらいいの？

放射性物質をできるだけ体内に取り込まないように  
することが必要

でも・・・

食事は、毎日の生活に欠かせないもの

つまり

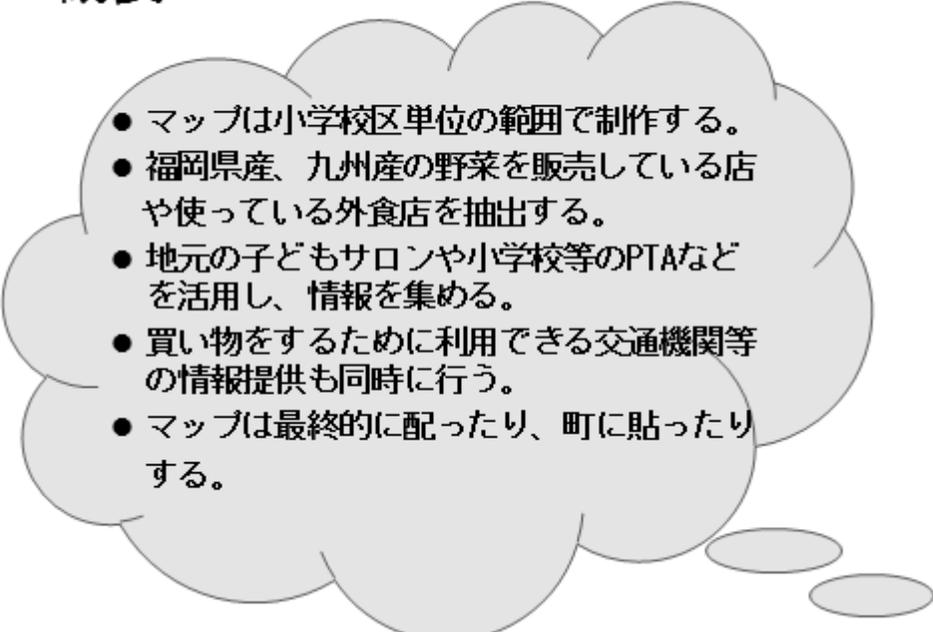
**食の安心＝生活の安心**



## 目的

- 安心できる食事がとれる。
- マップを作りながら、避難者と地域の住民とのつながりを作る。  
⇔ 地域住民の共生、地域の活性化

## 概要

- 
- マップは小学校区単位の範囲で制作する。
  - 福岡県産、九州産の野菜を販売している店や使っている外食店を抽出する。
  - 地元の子どもサロンや小学校等のPTAなどを活用し、情報を集める。
  - 買い物をするために利用できる交通機関等の情報提供も同時に行う。
  - マップは最終的に配ったり、町に貼ったりする。



つながる地域  
～選んで安全・食べて安心～

## 地産地消マップ

×

### 親子わくわく料理教室

時間	行動
10:00	公民館に集合、一日の流れの説明、班分け
10:10	小学校区の店舗で九州産の野菜を販売する店舗、九州産の材料を使用する料理を提供する店を散策 午後からの料理教室に使用する材料の購入
11:45頃	情報収集ができ次第公民館に集合、情報を共有しマップに書きこむ
12:40	昼食
13:30	料理教室(福岡の郷土料理)
15:00	試食会
15:30	片づけ・帰宅

## ・マップ作りの手順

### ステップ①情報収集

- 地元にある、福岡県産・九州産の野菜や果物を取り扱う小売店や飲食店を見つける。
- 普段住民がどのような店を利用しているか情報を集める。
- ネットスーパーを持つ店舗を調べる。

## ステップ⑨情報交換

- 集めた情報、口コミをもとに、どんな店が上がったかをまとめる。
- ネットワーク、PTAやサロン等で知り合った人同士で交換する。

## ステップ⑩マップに集約

- 小学校区の地図を描く
- 情報交換で見つけた店を地図に書き込んでいく
- 店舗の最寄りの駅やバス停を書き込む
- 店舗の外観がわかりやすいように写真をあげていく

## ステップ④展示・配布

- 地図を公民館・小学校などの公共機関を利用し、はってもらう
- A4サイズに縮小した地図を子どもがおられる家庭や一人暮らしの家庭、関心がある人等を中心に配布する

## ステップ⑤更新

- 定期的に情報を更新する

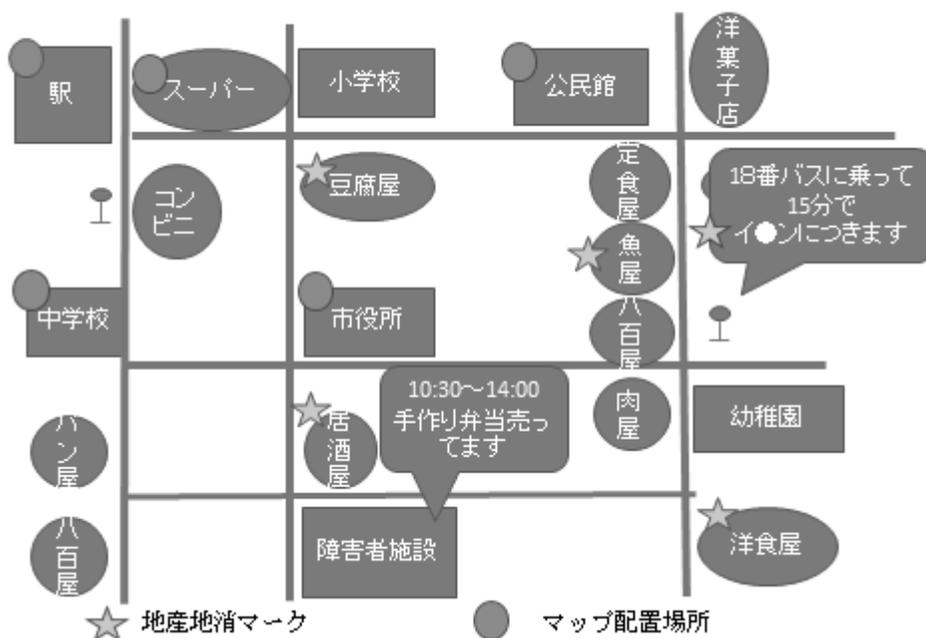
## 参加者の募り方

- 公民館にマップ作りに参加してくれる人の募集を提示する。
- マンション等の回覧板でチラシを回す。
- 市町村のHPで呼びかける。

## 情報発信の仕方

〈作ったマップを利用してもらうために〉

- 地元のお店にマップを置く。
- お店を巡るスタンプラリー形式にする。  
→スタンプラリーで全店舗を制覇した人は「〇〇市△△地区地産地消ソムリエ」に認定



## マップ作りが終わったら、午後から 親子わくわく料理教室

九州の食材を使い、  
九州の郷土料理やおやつを作ろう！



### 私たちが考えるこの活動の利点

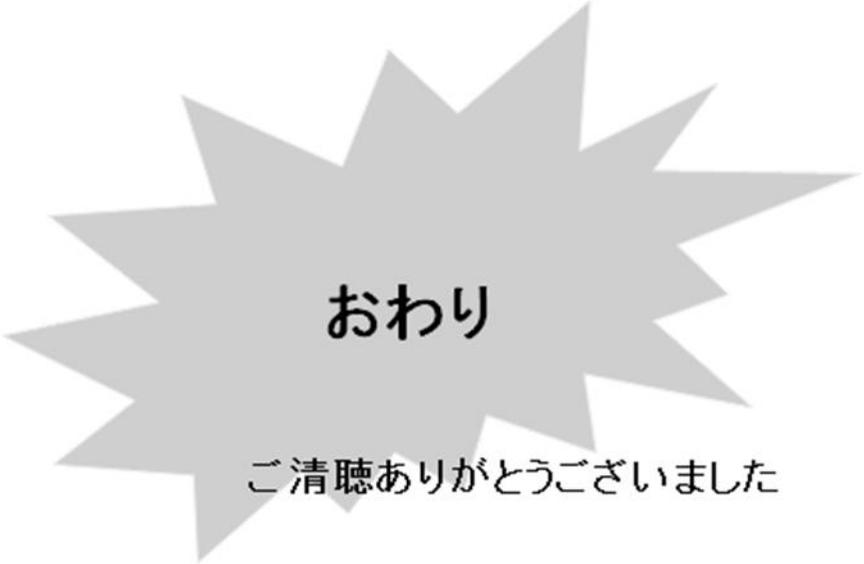
- 親子で活動することによって、親から子へ食に対する関心や情報を伝えていく
- 伝統料理を作るために、地元の料理教室を開催している団体や高齢者に参加協力を仰ぐ
- 結果地域の人がつながり、地域の活性化につながる
- 自分が今住んでいる場所はどのようなところで、どこに行けば何が買えるかを把握することで生活の負担が軽減する

## この活動の将来の展望

★地産地消レシピコンクールを開催する

★マップを定期的に更新し、地域の情報源の一つとして活用されるようにする

★一つの地域だけでなく他の地域とのつながりをもてるようにする



おわり

ご清聴ありがとうございました



# 福岡市グループ

大津慧、墨谷幸大、三宅恵梨子、村山明子、吉田圭那

## 聞き取り調査をしてみて思ったこと

- 周囲の人の理解が十分でない
  - 母子のみの避難者が多い
  - 震災の前後で価値観が変わった人が多い
  - 意識の差と情報の差
- 

## 周囲の人の理解

- ◆ 子供を連れて避難することを  
夫、両親、夫の両親、職場の人が  
理解してくれなかった
- ◆ (福島県以外に住んでいて)  
避難前に住んでいた場所で  
「避難する必要があるのか」と言う人がいた
- ◆ 避難先でいやがらせをされた人がいた

## 母子のみの避難者が多い

- ◆ 仕事があることを理由に、  
避難を決意できない父親が多い
- ◆ 母親ばかりが情報を集め、危機感をつのらせる
- ◆ 離婚せざるを得なくなった

## 価値観の変化①

- ◆ 食べ物へこだわるようになった
  - ・ 外食をしなくなった
  - ・ 高くても無農薬などの安全な野菜を選ぶ
  - ・ 売っているものが信頼できなくなり自分で作ることにした
- ◆ 「お金のために働く」、「ただ仕事だからする」ということができなくなり、自分の本当にやりたいことをしたいと思うようになった

## 価値観の変化②

- ◆ 生きているだけでありがたいと思うようになった
- ◆ 国の情報が信用できなくなった
- ◆ 周囲の人の考え方、本性のようなものが見えて不信感を持った
- ◆ お金よりも健康が大事だと思うようになった

## 意識の差と情報の差

- ◆意識が高い人だけが自分で情報収集をする
- ◆情報を持っていない人は  
避難しなければならないかどうかの  
判断ができない
- ◆自分から得ようとしないと情報が手に入らない

## 聞き取り調査をしてみて思ったこと

- 周囲の人の理解が十分でない
- 母子のみの避難者が多い
- 震災の前後で価値観が変わった人が多い
- 意識の差と情報の差

ということは…

誰もが  
正確な情報を  
得られるようになったら  
よいのではないだろうか

そのためには

みんなが震災について関心を持つ  
↓  
国に情報提供を促すよう働きかける  
↓  
国が正確な情報を発信する

★そうすれば…

- ・ 避難者への理解が深まる
- ・ 支援が充実する
- ・ 正しい判断ができる

自主避難者応援団体

# たんぽぽ

～広げよう被災者の声～



たんぽぽ

たんぽぽ = 活動  
風 = 社協  
綿毛 = 被災者の声  
土 = 地域住民



## たんぽぽ

### <目的>

原発の現状や、被災者・避難者の声を知ってもらい、より多くの国民の震災に対する関心を高める。そして国が正確な情報を発信するように促すことへとつなげる。



### <具体策>

被災に関する情報を広める団体(綿毛の会)をつくり、参加者を増やす

☞ 綿毛の会をつくる方法・・・

社協が既存の被災者団体の当事者に協力してもらえるよう呼び掛ける



## 綿毛の会

### < 具体的活動① >



- ◆ 講演会を開く(主催: 社協、講演者: 当事者)
  - \* 講演会のみを行う場合は、教育関係者など来てほしい人に招待券を配る
  - \* 社協の事業(子育てサークル等)を行う際にその活動のなか又は活動後に講演会を開く
  - \* 小中学校や高校でも講演の機会を設ける

## 綿毛の会

### < 具体的活動② >



- ◆ 「たんぽぽ」webサイトの作成
  - \* たんぽぽ・綿毛の会の概要・活動内容を記載する

## 綿毛の会

< 具体的活動③ >

◆ 余暇活動を行う

\* 料理教室など



社協が介入しない、当事者だけの活動

## たんぽぽを通して

綿毛の会の活動が広がっていく



地元メディアが活動を取り上げる



住民の、国の情報開示への関心が高まる



国が正確な情報を発信するようになる

## スケジュール

- 4月 当事者とともに社協に出向き、事業の提案をする  
社協が既存の被災者団体の当事者に  
協力してもらえるよう呼び掛ける
- 5月 「綿毛の会」結成  
メンバーへの事業の概要説明・ワークショップなど
- 6月 「綿毛の会」活動開始(講演会・ウェブサイトの作成・余暇活  
動)  
(毎回活動後に反省会を行う)
- 12月 1年間の活動の評価
- 1～3月 評価に基づいた活動の見直し・活動

## 終わり



インタビューの当日、初めて顔を合わせてみると“明るく気さくなお母さん”だった。

話をしていくうちに、自主避難という行動に揺らぎを抱えつつ、それでも「子供たちの健康のためなら」と気丈に振る舞っている様子を感じた。

それまで持っていた自主避難者へのイメージは、無意識のうちに刷り込まれたものだと気づかされた。

震災や原発事故が起きるまでは穏やかに生活していた方々が、自分よりも家族の健康のためを思い、生活を一変させなければならないという現実があることを目の当たりにした。



～外で遊ぼう！地域に触れよう！～

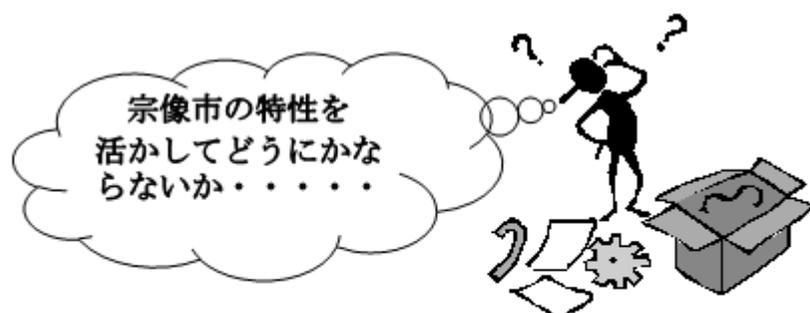
## インタビューを通して発見した課題

- 子どもの遊び相手や遊ぶ場所が少ない
- 子どもの運動能力が低下している
- 福岡に来て子どもが外遊びをする機会が減った

## 課題に対して考えたこと

- 子どもに外で遊ぶ機会を提供する
- 子どもの運動能力を向上させる
- 子どもたちに外遊びを教える

- 避難の主な理由は子どもの健康な成長のため！
- 自然がいっぱいあるところが、宗像市周辺の魅力であるはずなのに・・・



宗像市には、外遊びの出来る  
場所がいっぱい！



そうだ！  
子どもが外で遊べるような機会  
を提供しよう！！



## 事業の概要・目的

- 概要...宗像市に存在する大学のボランティアサークルの協力のもと、子どもたちに外遊びの機会を提供する
- 目的...子どもの健やかな成長を促進すること

## 期待できる効果

- ゲームなどの影響により、室内で遊びがちな子どもに対して、外で遊ぶ場所を提示することで、他の子と外で遊ぶ機会が増し、運動機能・コミュニケーション能力を養うことができる
- 子どもたちが自分の住んでいる地域について関心が持てるようになる

## 考えられる社会資源

- 社協(職員)：企画・運営、広報
- 学生ボランティア：レクリエーションの企画、見守り、当日の進行、道具準備
- 当事者：企画へのアドバイス
- 市民センター・学校：広報・宣伝の手助け
- 市役所：場所の使用許可

## ○学生ボランティア

※既存のボランティアサークルに協力を呼びかける  
(例：ゆかいくらぶ)

- ・レクリエーションの企画...社協からの提案を基に当日のレクリエーション内容を具体的に整える
- ・道具の準備...レクリエーションに必要な道具を準備する
- ・当日の進行...サークル内の企画者がそのレクリエーションを進める
- ・見守り...進行役以外の学生はレクリエーションに参加しながら、子どもたちの安全を見守る



## ○当事者(ふわりネットワーク)

- ・企画へのアドバイス...必要に応じて社協や学生に希望などを言ってもらう

## ○市民センター・学校

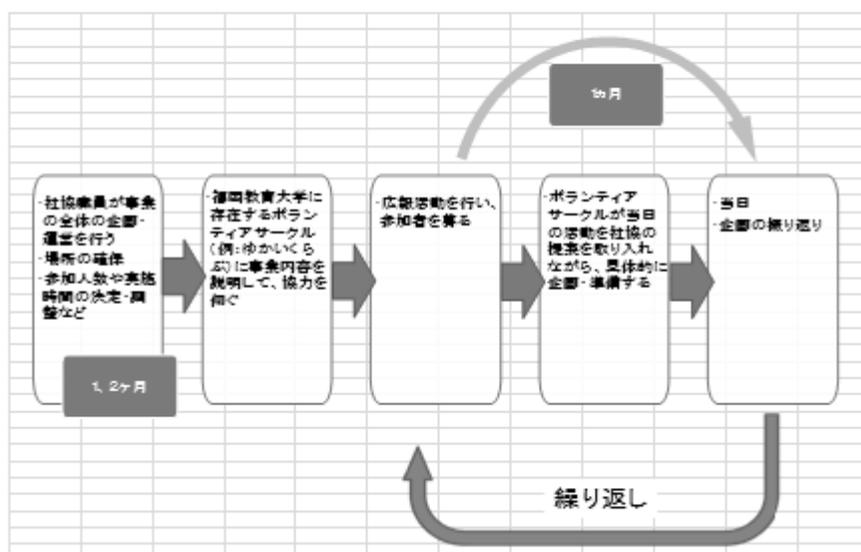
- ・広報活動の手助け...社協が作成したビラやポスターなどを置いてもらう

## ○市役所

- ・場所提供...企画するうえで必要な場所の使用許可を出す

- 場所...泉ヶ丘中央公園
- 月 2 回実施（基本的に日曜日開催）
- 参加人数...30人
- 内容...屋外レクリエーション
- 実施時間...10時～16時

## 当日までのスケジュール



An illustration of a bowl of ramen. A pair of chopsticks is shown at the top, holding several strands of wavy noodles. The bowl is black with a white decorative border consisting of three repeating square patterns. The text '鳥栖・久留米グループ' is written across the middle of the bowl, and '上野麻美・楠田志緒里' is written at the bottom.

鳥栖・久留米グループ

上野麻美・楠田志緒里

## 春の生活応援フリーマーケット



### 聞き取りから見えてきた課題

家電を持ってくるには荷物がかさばる。

放射能をあびた家電をもってくるのは・・・

地元と福岡の二重生活では、金銭面での負担が大きい。

家電を提供してくれることがあっても、本当にほしい家電が提供されていない。(真夏に冷蔵庫がない等)



自主避難者の家庭で家電が不足している！

自主避難者のニーズが満たされていない！



自主避難者

電化製品が欲しい。  
でも値段が高いし。。。



地域住民

そろそろ新しい家電に  
買い替えたいな。



自主避難者が、低価格で電化製品を手に入れられる。  
家電製品を買い替えたい住民にとって、処分の手間が省ける。  
フリーマーケットが地域での交流の場となり、自主避難者が地域との  
関係を結びきっかけの場となる。



## 事業概要



値段
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 提供者は無料。</li> <li>• 価格は修理代以上定価未満。</li> </ul>

もの
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 電化製品中心。</li> <li>• 開催日まで各自治体の公民館等で保管。</li> </ul>

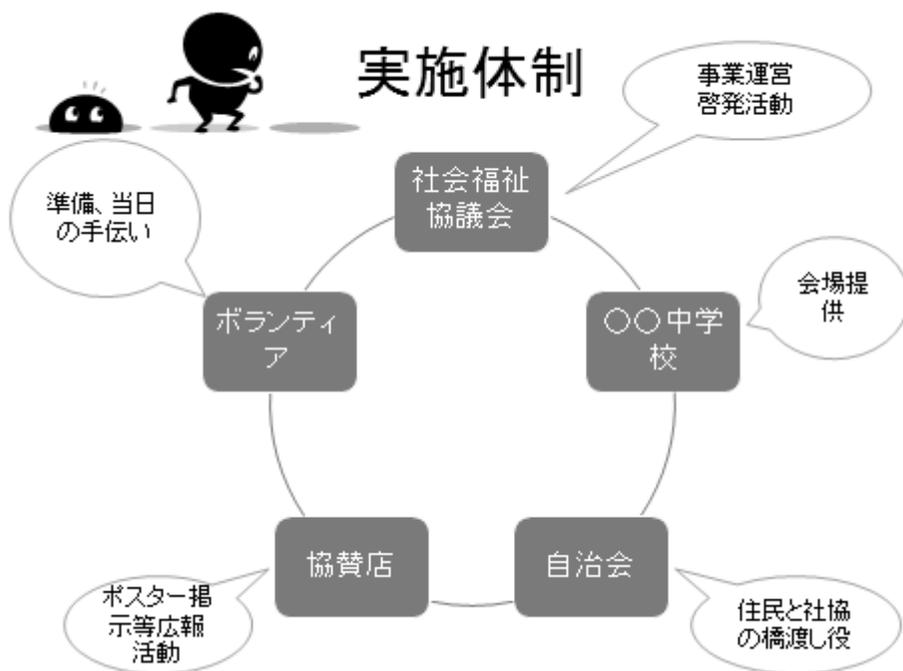
収益
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 修理費用を一部負担。</li> <li>• 余りは社協に寄付。</li> </ul>

# スケジュール



Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat	Sun
1/27 フェイス ブック更 新	28	29 A地区自 治会① (事業の 説明、意 見交換)	30	31 B地区自 治会① (事業の 説明、意 見交換)	2/1	2
3 協賛店へ の協力要 請	4	5	6	7	8	9
10	11	12 A地区自 治会② (企画書 提出、住 民への連 絡要請)	13	14 B地区自 治会② (企画書 提出、住 民への連 絡要請)	15 フェイス ブック更 新	16

Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat	Sun
2/17 大学等へ ボランティ ア要請	18	19	20	21	22 ポスター 掲示	23
24 小中学校 でプリント 配布	25	26 A地区自 治会③ (ポスター、 プリントの 配布)	27	28 B地区自 治会③ (ポスター、 プリントの 配布)	3/1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12 A地区自 治会④	13	14 B地区自 治会④	15	16
17	18	19	20	21 会場準備	22	23 フリー マーケット 開催



## 広報



### プリント、ポスターを使用した広報

- 学校で配布する子ども向けのプリント
- 自治会で配布するプリント
- 協賛店、スーパー等に宣伝協力依頼

### □コミ、ネットを使用した広報

- 自治会に参加し、自治会長と民生委員に情報を伝える。
- フェイスブック、ホームページにより情報提供する。



2014年3月8日

編集・発行 福岡教育大学 西崎 緑

〒811-4192 福岡県宗像市赤間文教町1-1

電話 0940-35-1683